
オレの職種は邪悪狩り-ブラックハント-

黒川 業

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレの職種は邪悪狩り - ブラックハント -

【Nコード】

N2326U

【作者名】

黒川 業

【あらすじ】

楔崎高校一年生のユウは、昼間はタダの学生に過ぎない。だが夜になれば裏の顔が現れる。それは邪悪狩り - ブラックハント -、太古に定められた人と妖怪の掟を破る者を如何なる場合でも葬り去る、違法なんてレベルではない危険な仕事。ある日幼馴染みのカナの依頼解決の際に、自分の正体がバレて仕事を失う危機に直面。だがユウはカナの最善な警告を断り、この仕事を続ける決心をする。ユウは再び、見えない闇に向き合い始める。

1話 邪悪狩り・ブラックハント・（前書き）

初めまして、黒川という者です。初めての投稿に初めての連載小説、文章は限りなく幼稚なものです。が読んでもらえると嬉しいのです。

1話 邪悪狩り・ブラックハント

この世には人間以外に喋る事ができる種族はいない、そんな風に思っている者は大多数だ。まだ小さい幼稚園児なら絵本の世界を信じ、動物も話せると考えるが大人になればそんな幻は時と環境に一瞬で埋もれていく。だが実際は違う、この世には人間以外に話せる種族が存在するのだ。しかし、その種族は少々危険な種族であり人間と共存する事は難しいだろう。何せ、この世界の支配権を人間に奪われ影に追いやられて人間を怨む者が、殆どだそうだから。

「最近妖怪も、異種族間の領分つてのを解つてるようだ。おかげでこっちの依頼は激減、始めた6年前の4分の1未満になってしまった・・・。あつてもラブレター探しやら。でも、本来はオレみたいなのは必要ないんだけどさ」

暗がりの書庫で一人の少年が文献を読み漁っている。彼の名前は冬宮幽真、都内の楔崎高校の一年生である。以後はユウと呼んでいく事にする。彼が今読んでいたのは、『江戸の闇』という江戸時代の役人達が遺した江戸時代の不可解な事件の数々が記録されたものだ。でも大半は、現代では半日もしないうちに解決してしまうものばかり。彼はその本をすぐに、床に投げ捨てた。

「あーあ、また本をこんな床に散らかして・・・。お兄ちゃん、いくらお父さんとお母さんがもういないからって、本を散らかしていい事には絶対ならないんだから！」

本が床に落ちた音を聞いて、書庫に入ってきたのは妹の未貴だ。歳は八歳も離れており、兄の幽真とは性格が正反対。彼らの両親と同じである。もっとも、彼らの両親は未貴が産まれた後すぐに死んでしまったが。母親は体が弱く未貴の出産で体力を使い果たし、父親は母親が死んで三年後に交通事故に遭い死亡した。親戚もなく、二人だけで生き抜いてきたのだ。親の愛情を口クに受けられなかった妹はとてつもなく、寂しい思いをしたに違いない。

「ところで、・・・依頼が入ってるんだよウチに・・・」
「ん？」

ミキはバツが悪そうに話した。いつも依頼が来た時には、大喜びで知らせてくるのに今回は異常にテンションが低い。ユウはいくつかの原因を探ったが、いろいろな可能性が浮かびすぎて解らなかった。その依頼主を聞いて、ユウもテンションが下がった。

「けっ、カナから依頼かよ。人生何が起きるか解らないから、いつかは来るとは思ってたぞ。でも、少々早すぎるんじゃないか？」

「ま、まあいつものように、変装してしまえばバレる事もないんじゃない？」

カナはミキも顔や性格をよく知っている、ユウの小学校からの幼馴染みである。顔はそこらのアイドルより美麗で、正義感が強い。オマケに勘が鋭くて、人の嘘を見抜くのが巧いときている。そんな相手に正体がバレてしまえば、ユウ達は路頭に迷う事になりかねない。幽真は必死に考え抜き、結論を出す。

「ミキ、今回は匂いも変えるぞ。オレ達の仕事はヤクザ共よりも、数万倍危険な仕事だからな」

「解った、じゃ近くのスーパーで香水買ってくる」

ユウは変装をして、カナと決めた待ち合わせ場所に来た。未貴は家で待機している。カナは白いワンピースでやってきた。ユウは仕事上では、楠田という架空の人物に変装している。今回は敢えて手の込んだ事をせず、いつも通りに振舞おうと考えた。

「あの、楠田さん・・・。アタシ・・・、その、えっと・・・」

「誰でもあんな依頼をするのは、気が引けるものです。そういう依頼したくない依頼を受けて、解決して差し上げるのが我々の仕事なのです。春田さん、詳しくお話願えますでしょうか？」

カナの依頼は、所謂ストーカーである。顔や性格の評判が良く、他校からも一目見ようと多くの男子が芋洗い状態に集まってくる。

ストーカーをする者はいくらでもおり、警察にも相談したが特定が

できず未だに続いているのだった。

「いつも何時頃に、変な気配を感じますか？」

「いつも決まって部活帰りなので、六時から七時の間ですね・・・」
やはりこの問題は、大抵の女性は話すのを渋る。楠田は慎重に言葉を選び、少しずつ聞いていく。

「では及ばずながら、私めがその依頼をこなして見せましょう。こんな形でも、変装ができるので」

楠田はカナの目の前で変装をしてみせ、カナを驚かせた。楠田は足早に去り、変装を解いて家に戻った。

ユウは肩で息をしていた。そんなにも走っていないのに、息が上がってしまっていた。

「ねえ、バれてないよね？」

「大丈夫さ、巧くやったから。それよりすぐに準備しろ、ストーリーカ―は六時から七時頃に出るらしい」

ユウはまたカナに変装し、カナの帰宅通路に向かって歩いていった。

六時頃、俗に言う逢魔ヶ刻。カナに変装した幽真は一人で、薄暗い道を歩いていった。無論、これはユウの作戦だ。ストーリーカーを現行犯で押さえるため、ミキは遠方で押さえる準備を整えていた。そして、ついにそのストーリーカーが姿を見せた。

「けっ、出たな不届き者！ミキ、ソイツ押さえる！」

「はいはい！」

ストーリーカーは隣のクラスの、冴えない顔の男子だった。ミキに縛り上げられ、更に顔が冴えなくなっている。ストーリーカーはそのまま、カナの前に突き出された。

「さっ、お嬢様の鉄拳制裁を喰らいなさい」

バキヤツ！という爽快過ぎる音と、ストーリーカーの情けない悲鳴が周囲に響き渡った。

カナは報酬として提示した茶菓子を差し出したが、楠田はそれを

アツサリと断った。

ユウは変装を解き、妹と夕食にありついた。今日も昨日と同じ野菜炒め、子供二人のスペックでは限界が目に見えている。

夕食は僅か二十分足らずで終わり、ユウは書庫に籠った。ミキ曰く、書庫で何かしていないと生きた心地がしないんだそうだ。

ミキは学校の宿題を終え、某大物女優が出ている人気ドラマを見始める。と、同時にユウが書庫から声を荒げた。

「ポリウム下げろ、読書の邪魔だ！」

ミキはイヤイヤ、テレビのポリウムを下げた。現代家庭では、あまり見られない光景だと思われる。

ドラマも終わり、ミキは寝る準備に入った。ユウはまだ、書庫で本を読んでいた。

翌日、学校に行ってみるとカナの様子がおかしかった。クラス中が騒然し、何があったのか尋ねても歯をカタカタ震わせているばかりなのだ。ストーリーカーは退治し、『春田果菜が自分をつけていたストーリーカーをブツ飛ばした』という噂まで流してストーリーカー対策を施した。ユウは嫌な予感がした。

「カナ、・・・何怖い顔してんだよ？」

「ユウか、おはよ・・・。ユウなら話しても、・・・いいかな・・・。アタシ、ストーリーカーに遭ってるんだ・・・。前に懲らしめたのに、また現れたの・・・。今度は家の前に立ってて、手にはナイフが・・・。たまたまお隣さんが買い物帰りで帰ってきたところだったから、ストーリーカーは逃げていったけど・・・。去り際にこう言ったの・・・」

『次こそは殺す。散々喚かせて苦しませてから、惨めな最期を飾ってやる』

幼馴染みは憤怒し、隣のクラスへ乗り込んだ。

「くっそ、いないのか！なあ、古川ってヤツ知らないか！？いつも来るのが遅いだけ、なのか！？」

「今日は風邪で休むとか・・・」

ユウはクラスを静かに出ていった。恐らく、被害者と遭遇したくないと考え家に引き籠ったのだろうと直感する。

ユウはトイレに入り、警察に電話した。無論、楠田の電話で。警察はすぐに対応し、ストーカーの潜伏地へ急行してくれた。

「何ですって！？古川は殺されてた！？それで、犯人のめぼしは？な、口から血を流してるのに外傷がどこにも無い！？毒物も検出されてない・・・？・・・そうですか、有り難う御座います」

電話を切ったユウは不可能犯罪を確信し、ある推論を抱く。そして、不敵に笑った。

「はは、何だよ何だよ。コレはアレか、アレだよな？よし、ミキに電話して準備を進めてもらおう」

電話を受けたミキは淡々と答え、電話をさっと切る。ユウは教室に戻った。

ユウは自分の推論の完璧さに酔い痴れ、顔を歪めないようにするのが精一杯だった。唇を噛んだり、手の皮をつまんでねじってみたりもした。しかし、周囲からは逆に変な目で見られてしまった。

「カナ、変な事聞くけどソイツの特徴を覚えているか？何でもいいから、頼む」

「何よ・・・、ホント変な事聞くのね。ソイツは首に、紅い痣があったわ」

ユウは自分の推論の完璧さに輪がかかった事で、更に高揚感を高めた。そして、学校での生活はアッサリといったものように終わった。

部活帰り、カナは再びストーカーに遭遇した。ストーカーはゆっくりと近づいてくる、殺す、殺す、殺すと何度も何度も呟きながらカナは後ずさりしようとするが、足が固まっていた。ストーカーは

懐から得物を取り出し、刃を女子高生に向ける。

「グヘヘヘ、まずはどこら辺の肉を食おうかな」

「待てよクソ野郎、その子に手出しするとロクな死に方しねえぜ」

ストーカーの背後には、楠田が拳銃を構えて立っていた。安全装置は既に外され、準備万端。健気な女子高生を、醜い野郎から守るため奮起したのだ。

「グヘヘヘ、馬鹿か貴様は。このワシに、そのような豆鉄砲は当たった感触すらせんぞ。この大妖怪、大入道様にはな！」

ストーカーは巨大化し、本性を現した。カナは腰を抜かし、地面にへばりつく。人間なら当然の結果であるが、この男は違った。

「お〜お〜、コイツは的がでないな。テキトーに弾ぶっ放しても、絶対当たっちゃうな」

カナはその一声に聞き覚えを感じた。この声は、ユウの声。．．．でも、きつと他人の空似。そうに決まっていると、少女は思い込もうとする。しかし、そんな脆い思想は砕けてしまった。

「やってみるがいい、若造！」

「あつ！テメエこの野郎、変装が解け．．．」

怪物が喋る際の風圧で、楠田、否、ユウの変装が解けてしまった。両者とも、この光景に言葉を何一つ出せずにいる。

この静寂を破ろうと、カナが口を動かした。

「あのさユウ、前に見つけたバイトってこういうのだったんだね」

「．．．まあ、そうだが。このバイト、つか仕事、イヤ違うな。」

学生とかは、職種に分類されてる。イヤイヤ、違う違う。この職はもう、六年くらい続けているんだ。10歳の時から、金を得るために始めた。母さん死んで、残った父親はクソニート。たまたま見つけちゃったんだ、危険な仕事だが高額報酬が確実にもののできるってネットに書かれていて。仕事内容は、互いの異種族間で結んだ掟を破った者を例外なく、秘密裏に葬る事。つまりは、こういう人間にちよっかい出しやがる妖怪たちをさっと消してやるんだよ。ミキには二年前に気付かれて、今じゃ協力してくれてるぜ」

大入道はこの隙を突いて攻撃して、豆粒のような人間二人を一瞬で潰せた。だが、できない。何故なら、その全身を背後から金縛りされているからだ。

「小娘！その技は、どこで覚えたのだ！？」

「いいじゃない、そんなどうでもいい事。自分の状況をまるで解っていない口ぶり、妖怪は人間と違って相当KYだね」

突如銃声が響き、弾丸が怪物の心臓を貫いた。見た目は普通の銃、妖怪ならダメージどころか当たりもしない。なのに、その銃弾は妖怪であるソイツの心臓を一発で貫いてしまったのだ。

「どうだ妖怪、拳銃なんかでアツサリ退場しちまう感想は。もつともコレは非売品『永遠の民の涙・アイヴァールドルフ』、妖怪にも効く特別仕様の銃なんだよ」

妖怪はその話が終わる前に、肉体と精神が終わっていた。

カナは悪夢から覚め、ユウの前に立った。一から全部説明させ、その後一発お見舞いしようと考えていた。

「改めて、説明しなさいよ。今までどんな事して、今に至るのか」

「お兄ちゃんはミキのために、今もずっと頑張ってるの！それだけじゃ、駄目なの！？」

「寝てる、疲れてるだろーが」

ユウはミキを気絶させ、説明に入った。彼是どのくらいだろうか、一時間以上話していた。

「邪悪狩り・ブラックハント・ね、解ったわ。少なくとも、アタシには何もできない仕事なのは確かね。」

勿論だけど、この仕事は正式な職業じゃない。極めて違法なのは、ユウも解ってるわね？」

邪悪狩り・ブラックハント・はこの世でもっとも疎まれる仕事、命を私欲に汚れた感性と能力で如何なる者も殺してしまう。違法も何もなく、捕まればその時点で死刑が確定する。しかも死んだという記録は、世界の闇に包まれ親しい者達も容赦なく弾圧を被る。カ

ナはミキをそんな闇に落とした、目の前の幼馴染みに激しい怒りをもっているのだった。

「今すぐこの仕事を止めなさい！生活の保障なら、アタシの親が切り盛りしてくれる！！ユウもミキちゃんも、あんな怪物達と闘わなくていいのよ！？」

「悪いが、オレは無論だがミキも多分、その誘いは断るぜ。理由は？、なんて野暮過ぎる事は聞くんじゃねえぞ。ミキはもう園児じゃない、立派な小学生だしある意味オレより大人だ。オレ達は自分で好きな道を選んだ。他人に、どうこう正論並べて人の希望を崩す権利なんかないんだよ」

ユウはミキを担いで、自分の家に歩いていった。

1話 邪悪狩り・ブラックハント・（後書き）

如何でしたか？こんな出来損ないを読んで、少しでも何かを感じていただけたら是非ともご感想をお願いいたします。

2話 悪夢の始まり・リベリオンス・ソウル・(前書き)

テスト終わってようやく、小説が書けました・・・。

2話 悪夢の始まり - リベリオンズ・ソウル -

昨日の一件については、カナは口外しなかった。しかし、いつ自分のしている事がバレるか解ったものではない。ユウは内心、これ以上なくドキドキしていた。

「もう、まだアタシの事信じてないんでしょ？絶対漏らさないから、安心してよ」

カナが隣でユウを説得するが、依然として心は晴れない。

ユウの本来の性格は、他人を信じるよりも疑うところにある。本人もその性格には気付いていて、何度も直そうと試みるが失敗に終わっている。

「まったく、今ココで記憶制御薬でもありや即刻飲ませて、すっからかんにしてやんのに」

「そんな都合のいいの、こんな学校にあるわけないわよ」

ユウはがくつとなって、机に顔を打ち付ける。その時の音が割りと大きかったので、クラスの皆に余計な心配をさせてしまった。

授業が始まる前に、先生は一人の少年を連れてきた。背は百八十以上もあり、顔もかなりのイケメンだ。一目見ただけで、大半の女子はいとも容易く落とされるだろう。

「皆、今日からこの学校に転校してきた狐部院九児だ。全統模試トップの天才、勉強で行き詰ったら迷わずコイツに聞くんぞ」

(このべいんきゅうじ・・・、とんでもねえ名前だな)

ユウはその転校生から、僅かにだが違和感を覚えた。それは目ではなく、鼻で感じた。『院』などの名前は大概、皇族や貴族に付けられていた証みたいなものだ。高貴なものなら普通はしないもの、それがあの転校生からしている。ユウはその日から、転校生に目をつけた。

土曜の正午を少し過ぎた辺り、狐部院がやってきた。遊びに来た

のではない、依頼をしにきたのだ。

「あの、楠田さん。依頼があるのですが、よろしいでしょうか？」

「ええ、構いませんよ。しかしこの場では、私も話を聞きにくい。

あの山で二人きりで話をしましょう、人が来ない場所だから偶然聞かれるなんて事もないですし」

二人の男は山へ向かい、その頂上にある高台に到達した。

楠田の目的は依頼を聞き、解決する事ではない。コイツの正体、狐部院が何者なのかを見定めるために人のいない所に連れ込んだのだ。

「依頼というのは、他でもない。最近、変なヤツがいるそう。人間のくせに何の力も持たなくせに百年あるかないかの短い寿命のくせに、妖怪を無闇やたら殺している輩がいるんですよ」

「ほう、それはそれは。さぞ不安な事でしょう。解りました、その不安」

楠田は前置きもなく、凶弾を放った。しかし、この弾は凶弾ではない。心臓を迷いなく狙った、威嚇射撃である。

「貴方の死を以って、解決して差し上げましょう」

「カカカ、その程度では、ワシは死なんぞ」

狐部院の心臓に開いた穴が、みるみる再生していく。仮にも楠田の銃は、妖怪に滅法効く特別仕様。そんなものは、蚊にも思わないと言わんばかりだ。

「やっぱ人間じゃなかったのか、オマエ。最初に会った時、獣臭さを感じたんだ。狸は匂いもちちゃんと化けれるからな。オマエ狐か？」

狐部院は正体を現し、姿を本来の獣へと戻していく。その大きさはかなりのもので、子鯨並み。ゆうに五メートルは超えていた。

「おいおい、狐ってこんなデカイ生き物でしたっけ？尻尾だけでも二メートルあんぞこりゃ」

ユウは変装を既に解き、臨戦態勢に入っている。化け物はニタニタと笑い、少年に告げた。

「小僧、生意気にも邪悪狩りを六年続けていると聞く。だが、そん

な辛い事をせんでも妹の暮らしはワシの力で、一生を薔薇色に染めるというのは造作も無い」

ユウは学校では狐部院とは、口を聞いていない。恐らく、カナが話してしまったのだらう。ユウは気にせず、攻撃を仕掛ける。

「喰らえこの野郎！」

弾丸は再び当たるが、すぐに再生する。

化け物は呆れ顔で溜め息をついた後、ユウに向かってきた。

「そこらの狐と間違えるな、うつけ者！」

（くそ、コイツ狐妖術を使ってオレの攻撃を避けてる。弾が心臓に届く直前に術をかけて、ノーダメージに近い状態にしているんだ・・・）

妖術というのはご存知のとおり、妖怪が使う術である。妖怪は多種多様な術を覚えており、人を驚かせたり妖怪同士で闘う時などに使用している。そのうちの一つ、狐妖術は狐独特の印を結び幻を創りだすもの。しかし、心臓に攻撃が届く刹那に術を使用して攻撃を回避するというのは今では不可能とされている神技だ。

ユウは横に避け、宙返りを二、三度して大きく下がった。ヤツの攻撃を避けた時、尻尾に当たらないようにするためだ。

「カカカ、ワシが何者が教えてやる。一度しか言わん、しかと耳に刻め小僧」

その言葉が発せられた瞬間、世界が数秒止まった。

「九尾、白面金毛九尾の狐じゃ」

「は、九尾？九尾はオマエ、殺生石になって今もずっと栃木にあるんじゃ・・・」

そう、九尾はその昔、古代中国を滅ぼした後日本にも上陸し日本も壊滅させようと目論んだが、ある陰陽師に正体を見破られ絶体絶命の危機に陥った時、石になったとされている。その石が、殺生石だ。

九尾は人間の姿になり、ラジオを取り出した。

『緊急速報です、栃木的那須湯元にある観光名所として親しまれてきた殺生石が忽然と姿を消しました。近隣の住民も何がどうなっているのか、解らないそうです』

ユウは愕然とした。最悪の化け物に、単身で立ち向かった自分を心底呪ったのだった。

「流石にヤバイかもな。今までも強くてヤバイ妖怪はゴロゴロいて全部倒してきたけどコレは酷い」

ユウはそう言いながら、銃口を九尾に向ける。九尾が復活したという事は、人間も妖怪も多大な悪影響を受けてしまうのだから。邪悪狩り・ブラックハント・としては、何としても止めねばならぬ化け物。妹を路頭に迷わせてでも、止めねばならぬ化け物なのだ。

「カカカ、使命感に駆られた愚かしい選択だな。そんな事しても、死期が近くなるだけだと」

バアン……！

「ぬお……。小僧、何故ワシの弱点を……。！」

銃声が響くと同時に、九尾は悶絶していた。弾丸は、九尾の尾のうちの一つに当たっている。ユウは不敵な笑みを浮かべ、こう言った。

「所詮はオマエも狐、狐には致命的過ぎる弱点があるからな。それは尻尾。尻尾はどう足掻いても、術をかける事で守れない部分でしかも、術を使う際に妖気を尻尾から放出している。そこをやられたら、オマエだってタダではすまないハズさ」

ユウの勝利確定の言葉に、九尾はただ呻き声をあげて睨むしかなかった。そのもどかしい怒りは、すぐさま頂点に達する。

「カツカカカカ！上等だ小僧、ワシが使えるのは今のような狐妖術だけではない事を！その体に、嫌と言うほど刻ませてくれる！！

我が第二の尾よ、その姿を変え全てを滅ぼせ！『二の手裏剣』！！」

九尾は九つの尾の一つを、巨大な手裏剣に変え二本足で立ち上がった。当てずっぽうで投げたそれは真つ直ぐに、ユウに向かって突っ込んでくる。

「暗極燦々、権等凡某」

地面に刺さった手裏剣は独りでに動き出し、再びユウに刃を向けた。九尾の呪文はまるで、どこぞの陰陽師のようなものだった。(断じて違うが)

「どうやったら、アイツの口を封じれる？油揚げなんか効果ねえに決まってるし、尻尾をぶち抜ける可能性は無に等しいし……」
結論、ムリです……。

もう日が沈みかける頃、戦闘は終わる気配がまったく無く均衡した状態で続いていた。

「カカカカカカ、ただか齢十六の小僧が！ワシの攻撃をココまでかわしてしまつとは、正直奇跡以上の産物じゃのう！だが、ワシの術はこんなものではないぞ」

九尾がそう言った直後、ユウの体が停止した。何かの罫でも何でもなく、ただ止まったのだ。

ユウは何が何でも抜け出したいところだが、どうやっても解除できない。この金縛りを解く事は、何人たりとも不可能である。何故なら……。

(仙術……！？まさか、アレは人と妖怪には使えねえ……。つまり九尾は妖怪じゃなくて、仙人つて事になんぞ！！)

仙術とはハッキリ言えば、魔術や妖術の完全な上位交換である。魔術のように詠唱を唱えずとも、妖術のように印を結ばずとも術を行使できる。完全無欠、この言葉以外相応しいものはない。

ユウは何もできず、九尾の放った手裏剣の刃を待つしかなかった。だが、ここで双方が予想もつかないイレギュラーが入った。

「秘技、仙術殺し」

パン！と、何かが弾ける音がしたと同時にユウの縛りが無くな

った。ユウは刃をかわす事に成功。九尾はこの出来事に、驚愕を隠せない。

「なっ、仙術が解けた・・・だと！？そんな馬鹿な事は無い、仙術は如何なる人間や妖怪も解けぬ！！解けるのは本物の『仙人』、それ以外おらんのだああ！」

ユウは左に人の気配を感じ、そちらへ向く。そこには面を被った背の低い子供のような人物がいる。

「あ、アンタは・・・？」

「ふふん、気にしないでいいよお兄さん。コレはボクが生まれながらに持っている力、『仙術殺し』っていうんだ。『未完成な』仙術なら、如何なる場合も問答無用で解いてしまうんだよね。九尾のソレは未完成だからね、ボクが力を使えば一秒もしないうちに崩壊するのさ」

声が高い、というより子供だった。その喋り方はねつとりと、癩に障るような感じだ。九尾は激昂して、面の人物に刃を向ける。

「ふふん、ねえ九尾。キミは妖力が完全じゃない、本来のキミならこの『仙術殺し』なんて安っぽい力なんて、何でもないクズだったろう。ふふん、内心かなり不安じゃない？だって、作れる武器は一つだけだし妖力は空っぽだ。オマケに仙術は『未完成』、どう足掻いてもまともな結末は無い」

「妖力が完全じゃない、って事は・・・！」

九尾は不死ではない、つまり殺せるのだ。完全な状態なら、弱点などというのは存在しない。しかし復活したてのせいで、妖力は空になっっているのである。

「カカカ、ワシは完全でないと不死の体になれん・・・。しかし、いくら妖力が空っぽとはいえ、そこらの妖怪と同じにするなああ！！！」

膨大な妖気が、全方向に放たれた。前後左右縦横無尽、音速を超えるそれは木々を薙ぎ払い街の方に行つて、一部の建物を破壊した。日本三大悪妖怪の一人は、妖気が空に近くても妖怪百人以上の妖力

を誇っているのだ。

衝撃は二人を吹き飛ばし、面の人物は高台の先にあるフェンスを破ってそのまま落ちていった。

「ふぶん、お兄さんゴメンね。タイムンで化け物と何も与えないで闘わせるなんてボクも酷だよね。」

でもボクはもうすぐ落ちちゃうから、ふぶん。葬儀は火葬で、お願いしま〜す。あ、名前教えてなかったよ。ふぶん、ボクはシンってゆーの。宜しくそして、さようなら〜」

シンは頭から落ち、血を垂れ流して動かなくなった。つまり、『仙術殺し』が消えてしまう。

「カカカ！もう一度受けよ、我が仙術を！！」

九尾は高らかに言い放つ、が、何も起こらない。むしろ九尾は、顔を悪くした。

「バカな・・・、仙術が発動せんうえ体力が減るだと・・・？」

ユウは九尾を背にして、シンが落ちた所を見る。そこには、血だまりのみがあった。シンは生きている、生きているのだ。

「ふぶん、パフォーマンスをやったのけるのは相当辛いよ。さ、お兄さん。その拳銃で九尾の頭、ブチ抜いてくれないかな？ふぶん、九尾もコレで終わりだよ〜」

シンは崖を上り、ユウの目の前に立つ。ユウは驚愕、九尾は啞然。高台と落下地点は、二百近くの標高差がある。頭が当たってしまった、即死のハズだ。

「・・・そりゃ助かるわな、ヘルメットとコートを何重にも付けてるんだから・・・。コートで衝撃を最小限にして、ヘルメットで頭を守る。後は動かないフリすりゃ、死んだふうに見えるよな」

恐らくあの血はケチャップであろうと、ユウは考えた。九尾は未だ啞然とし、頭を抱え込む。九尾はもう三千年以上生きていて、脳がもうオンボロの火の見櫓だった。

「カカカ、真に面白き二人よ・・・。次の闘いは、互いに全力で向かいたいものじゃ」

「そんな時間、こつちに無えつての！」

九尾はユウ達に突進した後、すぐに彼方へと走り去った。ユウが周りを見渡した時、既にシンは消えていた。この僅かな時間に、九尾の攻撃をかわしてユウの前から消えた。

シンはただ者ではない、ユウはそう確信した。

「あの野郎は、敵か味方が……。考え様で、どつちともとれちまうぜ」

ユウはフラつきながら、家路に着いた。

ユウは家で、ミキにこつ酷く怒られた。『なんでそんな化け物に単身でいくの！？』やら、『もう少し自分の命の重さを自覚しなさい！』など子供離れした事を延々言われ続けた。

「とりあえず、悪かった……。明日はまだ休みだろ、『アイツ』の所へ行つて全快すんぞ」

「『アイツ』って……。『あの人』って言いなさいよ……。『あの人』またかってカンカンになって、そのうち殺されちゃうよお兄ちゃん……」

ミキは不安の眼差しで、『あの人』の元へ行こうとしているユウを見た。

2話 悪夢の始まり・リベリオンズ・ソウル・（後書き）

九尾の狐はwikipediaじゃ殺された扱いですけど、殆どの本や話では不死とされています。この小説も九尾は不完全ながら不死の力を持っている設定で、これからも書き続けようかと思えます。

3話 癒しの時・ビューティ・ワールド・(前書き)

ハア、物理はやっぱり難しい……。再試受かってるか、激不安です。

3話 癒しの時・ビューティ・ワールド

九尾と闘い合った昨日、ユウはフラつきながら家に帰ってきた。ミキはそれを責めたが、ユウには小言を言い返す気力も無かった。そこでユウは、『アイツ』の所へ行こうと提案した。ミキは止めた方がいいと言ったが、怪我が大きいのでそれも言っていられない。二人は『アイツ』、否、『あの人』の所へ行く準備をした。

二人がやってきたのはなんと京都。東京から五百キロ以上離れていて、行くのに二万円近くする。金は無論、仕事で手に入れたものだ。

「久々に来たな、相変わらず古風でいいねえ」

「ホント、古き良きものって当にコレね」

二人は京都の街並みを見てしみじみと浸っているところに、背の高い青年がこちらに走ってきた。

「冬宮姉様で御座いますでしょうか？あ、私は『あの御方』の使いで水呂狗と申します。ハッキリ言って、河童です」

「河童の風貌に全く以って見えませんよ。ホントの人間、イヤそれ以上です・・・」

水呂狗は二人を、京都の金閣寺のある方向へ連れて行った。流石に夏なのか、河童である彼は苦しそうだ。ミキは前以って買った水を、彼に渡す。水呂狗はグビグビと一気飲みし、更に残った水を頭から煩雑に浴びた。

「有り難う御座います、ホントに助かりましたよ。さ、もうすぐですので頑張ってください！」

しかしまた、水呂狗は水が切れて停止してしまった。

「仕方ないから、オレがおぶっていきますよ〜と！」

ユウは意外と軽い彼の重さに幸を感じて、全速力で目的地へ向かった。

「着いた着いた、この荒れっぷりは相変わらずか……。妖怪の妖術修行の総本山、『臨極寺』」

世間には全く知られていない荒れ寺、臨極寺。この寺は法隆寺並みの古さを誇り、かつて納められた数多の宝物が存在する。恐らく宝の数は、世界中の名所に引けをとらないだろう。

「んじゃ呼ぶぞ〜、せええええの！」

「『御水様』アアアア！冬宮幽真で〜〜す！！」
「妹の未貴です〜〜！兄の怪我を、治して欲しいんです！！」

二人が叫ぶと目の前に、もやもやとした霧状の何かが現れた。それは徐々に形取り、生き物のような何とも言えない姿になっていく。うまい例えなら、埴輪である。

「ほっほっほ、よう来よったわ。ま、上がりんしゃい。中は結構綺麗にしてある」

境内に入ると、綺麗どころではない。完全にリフォームをしている。恐らくこの寺に通う妖怪達が、妖術を使って人間を脅して金を巻き上げたのだろう。本来ならユウの仕事でその者達は消されるはずなのだが、ユウは依頼が無いとしない。他の邪悪狩り・ブラックハント - に比べて、かなり怠け者だ。

「それで、どれだけ金を巻き上げたんだよクソ爺」

「口の悪さが更に際立つとるな〜、何なら作法もサービスってヤツかの？教えてやるわい」

三人は修行中の妖怪達をくぐり、奥の部屋に進む。その前には、綺麗な女の妖怪（完全にモデル型）が立っていた。

「お、オマエらとこのコは初対面か。このコはワシの一人目目の孫、小百合じゃ」

「おお〜・・・」ほっ！

その少女に見惚れていた少年を、妹とその子の祖父が同時に鉄拳制裁を決める。しかしコレが少女と少年を接近させてしまうとは、

予想外だった。

「だ、大丈夫ですか！？もう、お祖父ちゃんったらこの人人間なのに加減くらいしなさい！！」

「ご、ごめんよ・・・」

サユリは気の強い少女のようだ。その性格は更に、ユウの興味を惹かせる。そして妖怪なのに人間を嫌う傾向でなく、むしろ近づこうとしている。ユウは妖怪の嫁ならこのコがいいと強く思った。

しかしこの騒動で、ある問題が起こる。

「人間だと！？この妖怪の聖地、臨極寺に人間が紛れ込んでおると言うのか！」

「食おう！頭から、一気にバリバリと！！」

妖怪は人間が憎いうえ、人肉が好物な輩も多い。修行は中断され、ユウとミキを取り囲み襲い掛かろうとした。

「食い殺せ！！頭は俺様、てめーらは爪でも食ってる！」

「何を！？頭はこのオレが、じっくり味わわせてもらう！！」

「やめい愚か者共！この寺のしきたり、忘れたとは言わせんぞ」

妖怪達を止めたのは他でもない、御水様だった。彼らは大いに恐れ、御水様の前に跪く。中には鬼までいて、全員例外なく片膝を着いていた。

「これオマエ、この寺のしきたり三つ全部言ってみよ」

「ハッ、御水様・・・。一つ！人に仇を為すべからず！二つ！他の妖怪を尊重すべし！三つ！人と妖怪分け隔てなく、差別せず接するべし！」

この寺のモットー、それは『平等』。人間も丁重にもてなし、妖怪は身分差なく接する。そうする事で、人間と妖怪の一線を超える事は絶対とは言えないが確実に無くなっていくと住職は考えているのだ。

「オマエらは一つ目のしきたりを破った、よって罰を与える！百年間の『喜々乃真水』使用禁止！！」

「そ、そんな！」「和尚様、あんまりです」「修行の疲れが取れ

ないじゃないですか！」

『喜々乃真水』とは、この寺自慢の池の事だ。その池に浸ければ、あらゆる病や怪我が完治し寿命も延びるとされている。(実際御水様は、池に浸かって不死といえるくらいの寿命を得ている。)

「つてかよ、妖怪は並大抵じゃ死なないだろ。再生力も凄まじいし、そんな池必要ないじゃん」

「小僧！あの池に入ったのか、人間の分際でえー!!」
喚いている妖怪達を他所に、ユウは足早に池に向かった。

ユウは早速服を脱いで、池に浸かった。その池の心地よさ、温度などはまさに絶妙。病や怪我が治ってしまうのも、肯けるといってものだ。

「くくくう！この滑らかな水質、とんでもなくよろしい」

ユウが優雅に浸っている(つもり)ところに、別の人が入ってきた。ココの妖怪は罰で入る事が許されていない、という事は……

「ふ〜今日は修行で、結構汗かいたな〜」

(アレ？この声さっき聞いたな……。アレ？アレアレアレ！？待て、コレは何をどう考えても幻聴！幻聴以外に考えられね〜、もし幻聴じゃなかったら……！？)

ユウは声のする方向へ顔を向ける。そこには……、解るね諸君

「あ、さっきの人どうもです！……お名前聞いてませんでしたね……。つて、どうしたんですか顔をそんなに赤くして」

「あららららららららら！？サユリさんどないしはつたんです……。オレ、コレでも男ヤロウなんですけど〜!!」

皆様のお察しの通り、そこには美しき女神が人目を気にせず入浴タイムに突入している。コレを見てしまった下僕は、ただ平伏すのみ。ユウは速攻で土下座に入った。

「ああごめんなさい、人間の文化は男女混浴じゃなかったですね。

それでそこまで、体が興奮してしまっていたんですか。えへへ、アタシの体つてそこまで欲求が満たされます？」

「興奮つて、あ……」

ユウは自分の体の一部の激変に気付き、更に顔を赤くした。人間の男として、この場を一刻も離れたい。いつまでも妖怪とはいえ女の子に、自分の醜態を曝してはならないのだ。

「オレ、もう出るよ……。傷も治ってるし、何よりも……」

「あら、いいじゃないですか！」

サユリはユウを強引に池に引き戻し、ユウは池に背面ダイブした。

ザッバアアン

池の中に入った少年の目には、神々しき女神の姿がこれでもかと映し出されていた。人間にはまずいないであろう、この女体！今、少年は奇跡を見た！

（カワイイ人ですね）

サユリは顔を赤くして気絶した彼を、水上にあげて横にさせる。

ユウは目覚めると、自分の姿に驚いた。服を着ている、しかも池ではなく部屋にいる。

「はあ、あ、あのコに連れて来られて着替えまでさせられたのかよ……。服を着させてくれたのは感謝すつけど、見たもんなあのコ」
「別に、気にする事もないですよ」

ユウは飛び上がり、頭から床にぶつかった。サユリはオロオロするが、ユウはすぐ起き上がり顔を赤くした。ユウは大きく深呼吸をした。

「ふう、今日は変な日だ。河童が夏なのに粹がって倒れるし、ココの住職さんのお孫さんにオレの醜態を見られるし……。ま、それはとりあえず無かった事にしようかな」

ユウは何か切れたような顔で溜め息をつき、サユリを見る。サユリは小さく、笑って返した。

「いろいろあったから、忘れてたけど……。名前、聞いてなかったですね」

「冬宮幽真だ、みんな『ユウ』って呼んでる。サユリもそう呼んでもらえるよ、いろいろ助かるよ」

二人はしばらく、そこで一緒に並んで座っていた。傍から見れば、かなり発展しているカップル同然である。それも、今にもプロポーズをやってしまったいな。

「アタシ、最近産まれたんです。平成生まれの妖怪で多分ですけど、一番年上ですよ」

「平成生まれ？オレと同じ、平成生まれなの？妖怪で平成生まれなんて、初めて聞くんだけど。歳が若いヤツでも明治生まれなのに・・」

「お祖父ちゃんの八千三百五十二人目の奥さんの娘の子供なんですよ、すごすぎですよね」

妖怪の社会は、一夫多妻制である。つまり御水様は、何千何万の女をたぶらかして子供孕ませている事になる。世の男はこう思う、『あのクソ爺』と。

「ところで、九尾復活の話は聞いているかな？」

「ええ、もう日本中の妖怪の話題はそれですから。中国の一部にまで、伝わってるそうです」

九尾の復活は、世界の大半に悪影響を及ぼす。しかし、この化け物の復活で得をする者がいる。

「九尾の復活に合わせて、狐達が各地で暴れ回っているんです。人を山道で迷わせる程度はかわいいんですけど、時にはビルを破壊して中にいる人間を全員生き埋めにしたりなんてするんですよ」

「そのうち、『九尾従属狐軍団』なんて作られそうだな」

二人の会話に、御水様が割って入ってくる。

「九尾は確かに強い、しかしヤツを殺す方法ならある」

二人は驚愕の表情を隠せずに、御水様の顔を見る。御水様は確かに言ったのだ、『九尾を殺す方法が存在する』と、自分の口から言ったのだ。

「おい爺、冗談が過ぎるとぶん殴るぜ」

「野蛮な小僧め、ホントの事に決まっておるじやる……。この宝物と『仙術殺し』があれば、九尾は確実に殺せるんじやよ〜」

「『仙術殺し』……?」

御水様を取り出したのは、『黒鉄の御札』と呼ばれる札だ。和紙に包まれていて、紙にはハンゲル文字に近いような文字が書かれている。その材料の鉄は特殊で、妖怪の妖気を吸って輝きを増す。吸収量と速度が半端ではなく、大抵の妖怪は十秒もしないうちに死んでしまう代物だ。現に御水様はその札に妖気を吸われているのだが、本人はケロッツとしている。これは一つの伝説と言っていていいかもしれないだろう。

「コレで九尾の妖気を吸い、『仙術殺し』の力でヤツの仙術を封じる。そして、弱点の尻尾を潰してノックアウトってヤツじゃ!」

「って事は、シンは味方なのか・・・否、断定はしない方がいいな」
ユウの呟きに、サユリは反応した。

「何?ユウの友達なの?」

「違いよ、九尾と闘った時に割って入って助けてくれたヤツさ。子供だけど、さっき言ってた『仙術殺し』を使いこなして九尾の仙術を封じていたぜ。シン曰く、『未完成な仙術』にしか効かないんだってさ〜」

「そやつをココに呼べるか?」

無理である。シンはあの後姿をくらし、どこにいるかサツパリなのだ。

「そもそも、九尾はどこで仙術を学んだんだよ?やつは中国なのか?仙人に教えてもらったのか?」

「イヤ〜、ヤツはどうやら中国の宝物庫から書物を盗み仙術を覚えたようじゃ〜」

御水様曰く、九尾は元々タダの子狐だったらしく人語を覚え書物の文字を解読し仙術を覚えたんだそうだ。しかし、タダの狐が書物を盗み人語や文字を覚えて仙術を学んだのは異例である。

「シンは敵か味方が解らない、ヤツのオーラは何かこう色がゴチャ

ゴチャになつてゐるようなそんな感じがすんだよ。敵に回すには勿体無い強さだし、いつ本性を現すか解らないヤツを味方につけるのは正直気分悪い」

「そう？ギャンブルで味方につけてみるのも、一つの楽しみだと思ふよ。ふぶん、久々だねお兄さん。そんな久々でもないけど」

シンは突如姿を見せた。この寺には数多の妖怪がいる。いくら強力な妖術を持つていようと、一人か二人くらいには確実に気付かれる。だが、シンは誰にも気付かれていない。

「他の妖怪さんは皆眠ってます、ボク結構妖術使えるんですよ。『催眠虫の術』は眉間にデコピンすれば解けますから、そんな心配しなくていいですよ」

「オマエ、やつぱり解んねえぞ……。何がやりたいんだ、妖怪の絶滅とか言うんじゃねえだろうな？それとも何か、ただ暴れたいだけのバカなのかよ！？」

シンは笑つて答える。

「ふぶん、お兄さんのお察しの通りさ。ボクはただ暴れたいんだ、この力を……。最大限に使つて！」

シンは戦闘態勢に入る。ユウもすかさず、戦闘態勢に入った。サユリから銃が手渡される。

「オレが勝つたら、味方になれよ」

「ふぶん、ボクが勝つたら妹さんの命をちゃっかり取らせてもらいましょう！」

3話 癒しの時・ビューティ・ワールド・（後書き）

予想外の評価にビビりまくる自分がいる……。まだ3話しかあげていないのに、ホントびっくくりです。

4話 仙術殺し・セイントキラー・(前書き)

あと少しで、夏休みじゃうっほっほい!

4話 仙術殺し・セイントキラー -

ユウはかなり追い込まれている。シンはミキを人質にとり、鬨いを吹っ掛けてきた。しかもミキを閉じ込めた部屋には毒気が満ちていて、時間内に勝たないとミキは死んでしまうのだ。

「ふふん、さてさて何の術を使おうかな。おっ、ふふん。風が吹いてますね、それではボクは『風の妖術』を使いま〜す！」

シンは右手から風の弾丸を放った。ユウは横へ避け、弾は後ろの柱にぶつかる。後ろの柱には丸い穴が開いていた。

「この馬鹿者共！喧嘩は、外でやれえい！」

御水様は激昂し、妖術で造った津波を二人にぶつける。津波は二人を巻き込んで、麓にまで及んだ。

「もう一度行きま〜す！妖術『風車』、十連弾だぞ〜」

「オレの愛銃、アイヴァールドルフナメてんじやねえぜ！」

ユウは自分で避けられない弾のみを、銃で的確に撃ち抜く。シンに急接近し、銃口を向けて一発放った。

「ふふん、中々のフットワークと銃の腕前。ふふん、少しマジでいこうか」

「げっ、アレは『大風車』！風の妖術で、かなりハイレベルな術じやねーか」

小さな台風が、ユウに向かってくる。そこには飛礫も混じり、ユウの目にダメージを与えた。ユウはかすむ視界で、銃弾を放つ。銃弾が風を中心に当たり、風は消えていった。

「この銃は対妖怪のものだけど、特に妖気を貫く性能に長けてる。つまり、オレに妖術は無意味だよ。コレでオマエの妖術をくぐって、ダメージを与えられるんだからな」

「ふふん、成程……。つまりお兄さんには、この方法が有効なのかな！」

シンは片足を撃たれた状態で、間合いを一気に詰める。片足でし

かも助走なしで、十メートル近くの距離を詰めてきたのだ。とても片足とは思えない足捌きとスピードで、ユウの動きを封じにかかる。銃は接近戦では高確率で腐り、運が悪いと奪い取られて逆王手になりかねない。ユウもそれに合わせて、肉弾戦を決めた。

(くそ、何て動きの速さだ！コレは単純な素早さだけど、妖怪にもこんな速いやついなかったぞ！?)

「もらいました！」

シンの肘が、脇腹を直撃する。ユウは苦悶し、後ろへ下がった。

しかし、そんな事は相手が許さなかった。もし許せば、自分は再び王手をかけられるのだから。

「このチビ！さっきのお返し、ってかオラ！」

「うっつ！」

ユウは迫ってくるシンに頭突きをかまし、被っている面にヒビを入れた。

「このー！」

「どした、クソ面小僧が！」

フラついてるシンの面に、またもユウは攻撃をした。ヒビは一段と大きくなり、面が崩れだす。

「ふふん、ではでは……。このお面を、外して闘いましょう。コレ視界がほとんどゼロなんですよね、あ、そうだ！ボクがコレを外したからには、覚悟は決めたほうがいいですよ」

ユウはその瞬間、死に近い恐怖を感じた。コレは妖気、人間には決して放つことのできないもの。油断すれば、何もしないうちにある世行きである。しかし、初めて会った時には妖気は感じなかったとなれば、考えられる可能性は一つしかない。

「シン、オマエ半妖なのか……。?でも半妖にしちゃ、大きすぎる妖気だ」

「ふふん、ボクは確かに半妖です。明治時代に、妖気を得たオオカミと人間の間に生まれた半妖。父の妖気は凄まじく、周辺の妖怪は恐れ慄き闘おうとはしませんでした。しかし、父も歳でした。病に

負けて、この世を去りましたよ。残ったボクも、父に似て妖気が異常で誰も闘おうとしなかった。でもそれじゃ、ボクの衝動は満たされない！そして思った、生まれながらのこの『仙術殺し』と父譲りの能力で日本中で暴れてやるうってね！！」

シンの片方の目は、獣の目をしていて。オオカミの血が、体に獣の目をもたらしたのだろう。

「父の技、『霸風双槍』！そして、『蛇行塵』だ！」

シンは右手から二本の風の槍を、左手からは風で舞い上がった塵の塊を撃つ。塵は変則的な動きをして、ユウの体中を傷付けた。そこに二本の風の槍が襲い掛かり、ユウの背を強打する。

「ぐああ！」

「ふふん、形が残ってるな……。やっぱり父のように、跡形も無くならない。どころか、体を貫けてすらいらない。やはり加減が難しい、風の妖術は加減に苦労するのが多いからね」

シンは手を合わせて下腹の前辺りで、輪をつくり呪文を唱える。

「古き風、新しき風、この世に舞う全ての風よ。我の元に集まりて互いに混ざれ。全てを飲み込みし風は龍となり、全てを壊さん。我が前にいる、全てを消し去れ！！いけつ、『風龍砲』！！」

風は轟々と龍の鳴き声のような唸りと共に、目の前の土を根こそぎ剥ぎ取っていく。

サユリと御水様は妖怪達を起こして、総動員でミキを探していた。シンがさつきやって来た事を踏まえると、この寺のどこかにいるはずだ。

「可能性が高いのは、蔵の方じゃないかなお祖父ちゃん」

「うむ、行ってみようかの」

蔵には大量の宝があり、妖怪達はおるか当の御水様もほとんど行っていない。何かをやらかすには、丁度良い場所に違いないだろう。

「いない……」

「あの童、一体どこに女子を隠した？」

ミキの姿は蔵の中になく、あるのは財宝のみだ。宝の山を隈なく探すが見つからなかった。妖怪達からも、見つからないという報告しかなかった。しかし、この男は違った。

「一つ、怪しい場所が御座います。こちらです」

水呂狗はこの寺で修行する妖怪の中でも、随一の頭脳と妖力を持っている。そんな彼が案内したのは皆の修行場の境内だった。

「御水様、先ほどは無かったものがこの場所に存在しております」

「ん？・・・コレは、毒の臭いか・・・」

御水様を始め、周りの妖怪達もその臭いに気付く。サユリはその臭いの素を探し当て、ミキを見つけ出した。

「うとう・・・腕、溶けちゃってるよ・・・」

ミキの姿は非常にショッキングだった。左腕は皮と筋肉、血管やリンパ腺も溶けて骨が露出していたのだ。妖怪達のいくつかは、目を合わす事ができないでいる。

「早く池に放り込め！！まだ助かる、否、絶対に助け出すんじゃ！」

サユリはミキを抱きかかえ、池へと突っ走る。その時、ミキから話を始めた。

「お兄ちゃんに、銃を渡してくれましたか・・・？」

「うん、ユウくんはちゃんと受け取ったよ」

ミキはこの寺に来る時、嫌な予感を感じていた。それがただならぬものだと体が本能で察知し、自分が持っていた兄の銃をサユリに手渡したのだ。

「もう池ね、飛び込むわよ～～～！」

二人は水しぶきと大きな音を上げながら、池に飛び込んだ。瞬く間に腕は元に戻り、ミキの体力も全快する。二人は池を出て、ユウが闘っている鳥居前に急行した。

ユウとシンの闘いは既に決着していた。互いに大怪我を負い、辛い状況下でユウが勝利をもぎ取ったのだ。

「まったく、同じ事をするなんてバカだなオマエ。言っただろ、こ

の銃は妖気を貫くのに特化しているってよ。オマエの大技は妖気と周囲の風を混ぜたヤツ、オレの弾はそれを容易く壊せる。さ、大人しくしてもらうぜ」

「ふふん、ボクの負けですよ。しかし無茶しますね、あの爆風の中に突っ込んで中心を狙い撃ちとは」

ユウはあの時、避けようとも防御しようとしなかった。逆に風に向かい、全身の皮膚を切られ血を噴き出しながらも銃弾を放った。それは風を瞬時に消し去り、シンの右の肺を撃ち抜く。シンは予想外の結末に何もできず、ただ倒れるのみだった。

「お兄さん、ボクをこれからどうする気です？ふふん、妹を殺した最悪な野郎だ。ここで撃ち殺して敵討ち、つてのが定石ですよ」

「そうだな、元々オレの仕事はそういう類だ」

ガチャリ、ユウは銃の安全装置を再び外す。その矛先は、敵の頭蓋だった。コレを撃てば、敵を討ち心は一時晴れ晴れとするだろう。後で自責の念を持つが、知った事ではない。

「ユウくん、ミキちゃん無事です！」

「あっ！お兄ちゃん！」

二人の希望の言葉が終わるよりも先に、凶弾が放たれた。

しかし、シンは気絶するどころか苦しむ表情すら見せない。

「く、空砲……。な、何してるんですか！？ボクは妹さんの敵、何で殺さないんだ！？」

「そんなの、約束だからだよな」

サユリが傷ついた二人に歩み寄り、シンに顔を近づけた。その後、ユウと顔を合わせ互いに肯く。

「約束……。あっ」

「思い出したか、このドアホ。『負けたらオレの仲間』、死ねとは一言も言っていないぜ」

シンは顔を下に向け、しばらく黙り込んだ。そして、顔を上げた。

「ふふん、裏切っちゃうと思いますけど。・・・いい意味で」
こうして一つの試練は終わり、再び九尾退治の作戦を考える日々
が始まったのだった。

4話 仙術殺し・セイントキラー・（後書き）

今回は文字が少なめです。3話を前編、今回を後編というような感じで書いたので文字数が減っています。気にしないでゆるりと読んでください。

5話 二つくりさん・クレイジー・フォックス・(前書き)

台風の暴風警報が、コレ程嫌だと感じたことはありません。

だって、だってだってだって！先生が用意した夏休みの宿題を、自力で取りに来いとは如何なる用件ですか！？(愚痴なんで、気にしないでね)

5話 につくりさん・クレイジー・フォックス

ココで、九尾が復活した後に起きる悪影響を改めて纏めていこうと思う。一つ目、日本人口の約七割以上が九尾の餌となる。コレは最低限の被害であり、最悪全ての日本国民が食われてしまう。二つ目に妖怪達の混乱、暴走である。九尾は妖怪もお構いなしに食らい、妖力を蓄えていく。不安に駆られた彼らは、いつ人間に牙を向けるか解らないのだ。三つ目は狐達の悪行の過激化、四つ目はその狐達を鎮めるために大量の油揚げを消費しなければならぬ。四つ目は大した問題ではない、そう思う者は大多数だろう（作者も含め）。しかし、この四つ目は人間に計り知れない影響を出してしまう。

『ニュースです、一夜にして油揚げの値段が十倍に跳ね上がりました』

「ふふん、その値上げは大半便乗なんでしょうね〜」

「オトナって、汚いね」

「それが人だ、仕方ないさ」

二人と一匹の犬が、テレビを見て話している。この犬実は、シンなのだ。シンが犬になったワケは、想像をするに難くないだろう。人目というもの、世間の目は悪魔の拷問以上の恐怖になるものだ。

「金は天下の回り物というが、コレじゃ天下が金の回り物だよ。どつかの必殺〇〇〇人じゃねえが」

ユウがそう呟くと、ケータイが鳴った。相手はカナだった。

「よお、どうした？」

『あのお、また此間みたいな依頼していい？』

カナはユウの仕事を知っている数少ない人物、そしてユウが密かに恋心を抱く相手だ。野郎というのは、好きなコが困ると無意識に助けたくなる。ユウも知らず知らず、カナの話を興味津々に聞いているのだった。

『ユウってさ、妖怪関係オールOKでしょ？こつくりさん、って知

つてる・・・？」

「知らねーワケねーだろ、こっくりさんだぞ。で、そのこっくりさんでオマエのダチが被害を被ったというワケか・・・」

カナが依頼を言う前に、結論を早々と導き出し話を円滑に進める。カナはこのスピード展開に、まったく入る隙間がなかった。

「多分オマエ詳しい事知らないだろうから、説明しておくぜ。こっくりさんの正体って、何だか知ってるか？」

『確か、動物の霊が合体したヤツじゃ・・・』

「ま、そうなんだがよ。こっくりさんって、狐の霊なんだわ。漢字で『狐狗狸』だし。それは些細な事だからスルーだけど、問題はコレが大変危険な降霊術だっつー事さ。手順や儀式場、ソレに使われる物の配置が寸分でも狂えば人間は一発で地獄に落ちる」

誰でもした事があるこの遊び、しかしその実地獄に落ちるか落ちないかの瀬戸際を渡っていたのだ。

『ユウと昔したけど、その時は・・・たまたま巧くいったって事なの？』

「あの時にはもう邪悪狩り・ブラックハント-だったからな、こっくりさんの正しいやり方は知ってた」

「ふふん、好きな人と長話。青春ですね」

シンの声が、電話から漏れる。ソレはとてつもなく危険な状況を造り出した。

(この糞オオカミ！電話中に喋んなって、家に来た時教えたる・・・！)

『ん、その声テレビ？』

「ああ、ミキが音量上げたんだよ。驚いちゃったか、悪い悪い」

カナは不審に感じた。ユウは五月蠅い所、人が多い所を好まない根暗な部分がある。そんな彼の妹が不躰に、音量を上げるとは考えにくい。彼女はカマをかける。

『そうそう、依頼終わったらサマーランド行かない？大々的にリニユールしたんだって！』

「へ〜、ふふん。行きましよう行きましよう！」

(おいっ！)

もう後の祭り、カナにシンの事がバレってしまった。ユウは大人しく白状した。

『そ、ユウも大変なのね。でもそういう事は、隠すべき事じゃないと思う。もっとポジティブに考えてみてよ、家族が増えたって考えたら！』

「そう・・・か」

ユウはただ肯くのみだった。カナは幼馴染みで、自分に体術を教えてくれた女であり恋心を抱く女^{ひと}。そんな彼女をこれ以上、妖怪の話に首を突っ込ませたくないのだ。

「とにかくそのコの家に行こう、自分の部屋で寝込んでるんだろ？オマエ、来んなよ・・・」

「イヤ、アタシも行く！」

ユウは折れ、四人でそのコの家に向いた。

そのコの家族は泣き崩れていた。突然の原因不明の病、絶対に治らない不治の病。そんなケータイ小説の主人公となってしまった自分の子供が、あまりにも哀れでならなかった。

「お邪魔します、クラスメイトの冬宮です」

「春田です、明子ちゃんのお見舞いに来ました」

目的はこっくりさんの呪いからの解放だが、貞操上花を買ってお見舞いを装う事にした。

「さてと、何でこうなったかな！」

「わっ、何女の人の布団を引っぱがしてるんですか!?!」

シンが騒ぐので、三人は口を塞いだ。両親に、余計な心配はかけるものではない。

「は〜、予想はしてたけどさ。ホラ、オマエら見てみるよ。十円玉、手に握ってるだろ？」

こっくりさんにはあるルールがある。こっくりさんをやった後に

お礼をするのは常識の範囲内だが、その時使ったものを処分しなければならぬという事はあまり知られていない。この女の子は、こつくりさんをやった記念品に十円玉をもらってしまったのだ。

「で、どうするの・・・？」

「幸いタイミングがいい事に、コイツがいる」

ユウがシンを指さすと、シンはビシツと敬礼する。

「狐は犬、狼が怖いからだよ力ナちゃん」

「って事は、このコは妖怪なの!？」

「ふふん、妖怪といつても半分は人間の血が混じってます」

シンは大きく息を吸い、狼の遠吠えを上げる。

ウオオオオオウ

その後、ベッドで寝たきりで動かない彼女が暴れ始める。その騒音に両親も気付き、部屋に駆け込んだ。

「明子! どうしたんだ、まるで獣だぞ」

「お父さんお母さんは、下がってください!!」

ユウは両親を強引に部屋から出し、一階に蹴飛ばす。ミキもあまりの暴れ様に、足が震えていた。

「震えてんじゃねえぞミキ! こんなもん今まで、どんだけあったと思ってるんだ!」

「あつ、ゴメン・・・! それじゃ、いきます!!」

ミキはポケットから、赤い粉が入ったビニール袋を取り出す。そしてそれを部屋全体に撒き散らし始めた。

「ごほつ! 何コレ、唐辛子・・・!？」

「ふふ、ぶほつ! ん、何ですかイキナリ!!」

ミキが使うのは妖術でも、魔術でもない。それぞれの妖怪に対処するため、僅かながらの日用品を武器に変えているのだ。この唐辛子は一般のもの。唐辛子は動物を興奮させたり、鼻を効かなくさせる効果もある。コレを使えば、とり憑いているこつくりさんをおび

き出せる。

「又オオ、コノワタクシメヲ・・・！ドコノドイツダ、又オオ、メガミエナイ！」

少女の口から狐の顔を持った怪物が、吐瀉物のごとく現れた。これが、こっくりさんである。

「アレ・・・人！？人なの！？」

「そう、こっくりさんに失敗したヤツらは数日後にこっくりさんに振り込まれ、こっくりさんと共に地獄に落ちていく。もうアイツらは、助けるのは無理だぞ・・・」

カナは目の前に広がる世界に愕然とするが、その気持ちはすぐに吹っ切れた。ユウはその顔を見て、一安心しそして心配になった。

「まずは、そのコの魂をこの怪物から引っ張り出そう。カナ、悪いけど引っ張る役はオマエだ。オレはアイツの攻撃を、一発も当てないように頑張ってみる・・・何だよその顔、オレはプロだぜ」

「上手く、やりなさいよ・・・ユウ」

カナが怪物に向かって走り出すと同時に、こっくりさんは攻撃を仕掛けた。狐の形をした火の玉が、カナの上から降り注ぐ。

「来たな、おい二人とも！」

「わかってます！！！」

ユウを先頭に、三人はこっくりさんの猛攻からカナを必死に守る。だが相手は多くの人間を食らった怪物、人間の魂にある生気を吸い妖気を作り出せば何度でも妖術が使える。

「ふふん、ミキさん・・・もう少し踏ん張ってもらわいと・・・、ホントにヤバイですよ！」

「シンくんも、もう少し頑張ったら！？」

ミキはシンの体を支える役になっている。シンの妖術は凄まじいものが多いが、半妖であるが故に衝撃も大きく自分も吹っ飛んでしまうのだ。ユウの闘いでは、妖術より体術が主だったのでそこまでダメージは発生していない。半妖、半妖怪という生き物は何気に辛い体質を持っているのである。

早いんだし」

ユウはカナに事後報告をしていた。こっくりさんは地獄に戻った事、その際に多くの人間が地獄に落ちた事、そしてクラスメイトが元気に学校に来た事などを話した。

「そう言えば、礼の一つもしてねーか。ほら、オマエ欲しかったる」

ユウはカナの手に、青い石が付いたネックレスを渡した。

「コレ・・・、いいの？だって、このネックレス・・・」

「構わないぜ、何もそこまで苦しい額じゃないんだ。四、五万くらいならどうとでもなる」

カナは頬を赤らめて、バカと呟いた。

5話 ニっくりさん・クレイジー・フォックス・(後書き)

ヤバイ、文字数が減ってきてる……。力が減ってきているというのか(ウン)？

6話 狐の猛攻・フルアタック・(前書き)

明日はもう八月、葉月です……。学校へ行くのが、かなり面倒です。

6話 狐の猛攻・フルアタック

狐の暴動が過激化し、人間は避難所でその暴動をやり過ぎそうと必死に耐えていた。しかし、狐達の妖術にあっけなく潰されてしまふ警察や自衛隊。この日本を救えるのは、最早邪悪狩りの冬宮幽真のみになっていた。

「府中の避難所が、破壊された・・・！？狐共、本格的に人間狩りに出るつもりかよ」

「府中なんてすぐ近くじゃない、早目に移動しないと狐達に襲われるかも」

ユウはすぐさま電話をかける。相手は内閣総理大臣、木村首相だ。「府中の件は、もう片付いていますか？片付いているなら、これから言う場所に都民を避難させてください。場所は、臨極寺。京都の金閣寺方面にあります。そちらの方から、使いが来てるハズ。その者に案内させてもらってください」

『わ、わかった・・・』

首相は、渋々納得する。自分には逃げることで以外に道がないのだと、心の底から思い知らされたのだから。しかも未来を託した相手は、まだ高校生。日本のトップとは名ばかり、実際には無力なただの一般人である。

「では、オレはこれから狐の討伐に当たります。お気をつけて」

『君もな・・・』

非常事態の最中、一分にも満たない電話は静かに終わった。

ユウは例によって、ミキを気絶させた。ミキは一緒に闘うの一点張りで、ユウの言葉を一切聞かなかったのである。

「ミキ、オマエは寺で人と妖怪を繋ぐつつー大事な役目があるのさ」

ユウは狐達の目の前で、一人でいた。そして、狐千匹対人間一人の死闘たたかいが始まる。

「殺せ！」「小僧、死ね！」「我ら『武蔵野狐壱千群』、人間一人に落とされるものか！」

ユウはその場から動かず、無言で銃を取り出す。いつもなら永遠の民の涙・アイヴァー・ルドルフ・一丁だが、今回は二丁拳銃。『牙獣の激昂・デスレイズ』、攻撃範囲の広さに特化した前者とは異なるタイプだ。

「さてと、二丁拳銃なんて初仕事以来だ。さつさと帰れよ、ケダモノ」
「あ？」

一匹の狐の頭が吹っ飛び、地面に落ちる。狐達は怯え、後ろに下がらだした。

「それがかの『武蔵野狐壱千群』か、情けないなオイ」

ユウの目から感じるもの、それは場を圧倒する狂気。人間のレベルを超える、禍々しいものだった。

しかし、狐達も黙ってはいない。狐達は四方八方から、縦横無尽に襲い掛かる。

「闇雲にいつても勝てないだろ、戦術のせの字もねーのか」

ユウのもう一丁の銃が、前方の狐十数匹を一瞬で撃ち殺した。狐達は、完全に怯えてしまった。

「オマエら、解ってるだろうな？この負けが、どういう意味を表すのか。オマエらは九尾の後ろ盾を失くして放浪状態、つまり九尾の所に戻っても、妖気を吸い尽くされて子狐に戻るか死ぬだけだぞ」

「解った、我ら『武蔵野狐壱千群』はもう二度と人の領域を荒さぬどうか、命だけは・・・」

ユウは震える狐達の道を抜け、先へ進む。
しかし、すぐさま新手が現れた。

「ハッハハハ！よくもまああの狐千匹を、赤子のように手懐けましたね。おっと、ワタクシ妖狐の中でも中間の位の宋狐そんこと申す者。

天狐の位になるまで、後五百年以上もかかる下っ端でド中途な狐です。ですが、九尾あのかたに貴殿の首を渡せば！ワタクシは天狐どころか空

狐になれる！」

「尾の色だけ、体と違うな」

ユウは二丁拳銃を構え、撃つ。宋狐はその弾を、当たるワケないと言わんばかりにかわした。今度は周りの木々を狙い、樹を倒しまくることが宋狐の動きを止めようとする。

「さながら人間版天狗倒しですか、イヤイヤ面白い。今度は、こちらから」

宋狐の尾から無数の針が発射され、地上を針の嵐が襲った。狐妖術『針雨はりさめの術』、狐妖術の中では比較的メジャーなものだが、位が高いと空襲レベルに達する。自分の毛を妖気で固め、放つ技。まるでどこぞの鬼太郎である。

「狐妖術は殆どが幻術、この針の雨も元は体毛だ。だったら話は早え、眉に唾塗りやいいんだ」

この対処法は慣用句にもなっている。マユツバという言葉は、本来は狐の化かしを受けなかったためのもの。それがいつしか、嘘のような事柄を指すようになった。

「ハツハハ、その対処法はもう古いですよ。眉に塗った唾が乾けば、一瞬で幻術にハマる。唾がかわくまでの間は、こちらのお得意肉弾戦で追い詰めればいいのですからね」

「獣に肉弾戦なんざ、まともに見えるか？牙と爪以外何も武器が無えぜ」

唾が乾くまでのその時間は、まるで子供のような喧嘩が巻き起こった。地面をゴロゴロ転がり、引つ掻くわ噛み付くわの大喧嘩である。唾は一向に乾く気配が無く、眉は未だ濡れている。

「ぐっ、爪が馬鹿みてえに・・・食い込みやがる!!」

「貴殿もかなりヤバイですよ、何なんですかこの握力・・・」

交差する二人の腕から、細い血の線が溢れ出す。宋狐の腕はユウの握力に耐え切れず、ユウのは宋狐の爪が血管に到達していた。

「こ、んの野郎がつっ!!」

「がああぁ!!」

ユウの頭突き、それが宋狐の眉間に激突する。衝撃はかなりのもので、宋狐は地面に蹲った。

「おっ、乾いてる乾いてる。・・・唾つける余裕、無いなコレ」

宋狐はすぐに反撃をし、ユウに銃を使わせなかった。避けるにも一苦労、当たってなんぼのカウンターが最適だと、ユウは直感したのだった。

「ハッハハハハ！唾は乾き、打つ手も無いようですね！ワタクシの幻術で、しっかりと殺して差し上げましょうかああ！」

狐妖術、発動。

ユウの体はみるみる石になり、その体が地面に引きずり込まれていく。

妖狐の爪が、ユウの首を刎ねんとしている。

ユウはただ考えていた。これは、これは、これはタダの幻。実際には無い、と。

「そうさ、幻術じゃなくて現実を見る。現実さえ見れば、正解不正解は関係ない。少なくともソレが本物だって、自分でハッキリクッキリ解るんだしよ！！」

ユウは石になった右腕を同様になっている左腕で持ち上げ、アッパースイングで宋狐の首元へと持っていく。もう、勝負は決した。

「なっ」

「負ける、ケダモノ」

寺に知らぬ間に避難させられていたミキは、偶然避難していた力ナに遭遇した。

「カナちゃん、避難してきたんだね」

「ミキちゃんこそ・・・。そうだ、ユウいる？」

兄は単身で東京に残り、侵略者達と死闘を繰り返している。妹には解っていた。兄はそういう人なのだ。冬宮幽真という、一人の男

の大盤振る舞いである。

「くそ！この居心地悪い古寺、早く出たいもんだぜ」

「首相も首相だよ、何でこんな京都の山奥に・・・」

せつかく安全が保障されたというのに、愚痴をこぼす輩がいた。

こんな態度は、寺の妖怪達にとって実に不快なものだ。妖怪は人間と違い、寿命は最低でも八百年。オマケに生まれながらに妖術という、とんでもない武器を使える。そんな彼らに敵視されれば、人間など一夜にして滅ぶだろう。

そして、愚痴を言った輩に制裁が下った。

「「ギャギャアアア！！」」

雷を帯びた二頭の獅子が、愚者の頭上から現れた。大口を開け、頭から食らおうをしている。

「ダメ！人を食べちゃダメ！！」

その言葉に獅子達はピタリ、微動だにしなくなった。

「ミキ、ちゃん？」

「この雷獣達、アタシが飼ってるの。寺に預けっぱなしだけど、アタシの大事な家族だよ。お兄ちゃんはこの事、多分知らないと思う」
ミキによると、前の仕事で傷ついた彼らを兄に内緒で保護し寺に預けたそうだ。

「こ、こえ〜・・・」

「貴方達も、この寺に来たからには少しは礼儀ってもんを弁えなさい！」

トドメのカナの怒号で、後に愚痴をこぼす輩はなかった。

ユウは宋狐を倒し、前に進んでいる。・・・ハズなのに、景色は一向に変わらない。

「ありやく？幻術か、ヤバイヤバイ。空間ごと幻術にハメるなんて、コイツは天狐か空狐だろ・・・」

「なんや、もうこの顔忘れたんか。邪悪狩り・ブラックハント、冬宮幽真！」

目の前に、片腕の無い男が立ちはだかる。その目は、復讐や憎悪に満ちていた。

「難波の喜助狐、随分とご無沙汰だよ」

彼は天狐、空狐に次ぐ最高レベルの狐である。ユウとは三年前に一戦交え、右腕を切られた拳句に逃げ出した。九尾復活を好機と考え、ユウに仕返しにきたところだろう。

「右腕を失くしても、狐達からの信頼は厚いんやけど……。どうもオマエに負けてから、オレの事ナメとる連中が出てきてん。ま、もう千年くらい生きれば『生き恥』も流れるやる。でも、そんな弱小のクソつたれのする事やさかい。今、ココで……。九尾の大旦那の命令という口実でオマエ殺すで」

彼は腰の刀を抜き、ユウに切りかかる。ユウはとっさに左によける。が、ココは狐妖術の中。左によけるハズが、なんと前に前進してしまう。

「ええい、一発喰らえ！」

「そんな木の枝で、何ができるっちゅうんじゃ」

喜助はニヤニヤしながら、ユウの行動を嘲笑う。

ユウの手には、銃ではなくタダの木の枝があったのだ。ユウは齒軋りし、ソレを喜助に投げつけた。

「おゝい、後ろ下がってみゝ。落ちて逝ってまうぞゝ、氣いつけや」

「はっ、そんな言葉に騙されるかよ」

後ろに下がった瞬間、少年の体は宙に浮いた。コレは、どこかに落ちる時の感覚だ。ユウは悟った、真つ逆さまに落ちてしまふ、と。「うわああっ!!!」

ユウの完全な負けだった。狐妖術を最大限に活かされ、ユウは最後まで翻弄されっぱなしだった。狐妖術、幻術とは相手の疑心に働くタイプの妖術。心を持ち、特定の文化や文明を築いた生物なら如何なる者も捨てられないもの。『疑心』、何かを完全に信じるといふ事は理論上不可能なのだ。喜助はその心に入り込み、ユウを掌握

していた。

ユウはそのまま狐の罠にハマっていく。如何なる者も抜け出せない泥沼に、心を入れていく。

『コレで蓋してまえば、コイツは永遠に覚める事は無いわ。そう、自分の体が骨も残らなくなってもや・・・』

喜助がユウの心、魂に触れようとした。その時、

ガシツ・・・

『何やと!?!』

『ははっ、・・・一緒に落ちてこーぜ。永遠に覚めない夢の中に全身、頭の毛一本まで浸かろうじゃねえか。ずーっと、二人でお話してえなオイ・・・』

ユウの魂が喜助の腕を捕らえる。ココは狐の幻術世界であり、ユウの心でもある。喜助は高をくり敵の本拠地といえる空間に、ノーガードで侵入していたのだ。

ユウの手は離れない。噛み砕かれて腕が曲がるうが、首を引き裂かれようが、内臓をまるごと抉り出されようが。

『んな事やつても無駄なの、オマエが一番解ってるだろ。ココはあくまで幻だ、そんな場所のヤツらをいくら鬻り殺したってリアルじゃ何のダメージも無え。初っ端からハメたのが、失敗だったな』

『何を・・・!』

ユウの腕がより一層彼を、強く引きずり込む。

そして、形勢がその場で逆転した。

『そおれ!!』

『うおおおおおお・・・』

ユウは喜助を一本背負いで投げ飛ばし、代わりに喜助の魂が黒い淵に吞まれていった。

「ふー、ようやく戻ったな。あ、コイツ早く殺さないとな」

ピクリとも動かない無抵抗な獣の体を、一発の弾丸が貫いた。

九尾は怒りに燃えていた。同じ種族の狐達が、時間が経つ度に急激にその妖気を減らしている、否、減らされている事に気付いたからだ。

「あの小僧！宋狐や天狐までも殺つたのか、許せん！！・・・残る強い狐は蝦夷のヤツじゃが、ヤツがワシの言う事を素直に聞くかどうか・・・。否、考えなくてよい。おい！」

九尾は部下の狐を数匹呼び出し、伝令の命令を与えた。

「よろしいのですか、あの『蝦夷のお心』様は大変気難しい方だと耳に入れていますか・・・」

「九尾様、こうなれば自ら赴いて叩き潰すしか！」

九尾は一喝し、一万の部下達を黙らせる。

「ワシはまだ妖力が回復しておらんから・・・、頼む。ヤツに借りをつくるのはどれほど危険かなど、元より承知じゃ・・・。早う行け！時は、待ってはくれんのじゃ！！！」

「・・・はっ！！！！！！！！！！」

6話 狐の猛攻・フルアタック・（後書き）

解ってると思いますが、『宋狐』は自分のオリジナルです。天狐は実際にある狐の位なので、知っておいたら役に立つかも（立つワケない）。

7話 空狐・格蘭・フォックス

ユウは宋狐、天狐を倒し確実に九尾へと近づいていた。たった一人で、一步一步前に進んでいた。しかし、ユウは少し物寂しく思っていたのだ。そんなところに、アイツらが現れた。

「幽真様、遅れて申しわけありません」

「ユウ、力を貸すわ」

現れたのは水呂狗みろくとサユリだった。二人とも、隣極寺の一件でいろいろ手助けしてくれた優しい心の持ち主である。とくに、サユリはイベントまでやってのけサービス精神旺盛だ。

「成程、宋狐と天狐が立ちほだかったという事は次は恐らく・・・」
「空狐だろ、順番的に考えて」

空狐は三千歳を超える、年老いたというレベルを明らかに飛び越えているくらい長生きした狐の事である。基本は大人しいそうだが、九尾復活で過激化する恐れがあった。

しかし、三千歳を超える狐など現代にはいない。明治に流行った狐狩りで狐達は、多くの命を散らせたのだ。

「おやおや、空狐がこの世にいないとほざくか・・・。我が居るぞえ、この『蝦夷のお心』がなあ」

「どこから・・・？」

その声が終わると同時に、四方から禍々しい邪気が噴き出す。三人はバラバラに分かれて、この攻撃をかわした。

「妖術『鬼枝乱れ』、妖術『黒円陣』」

周りの木々が枝を伸ばし、三人に襲い掛かった。更に地面には黒い円陣が輝き、その円から黒い炎が発射される。

「くそつたれ！」

ユウは銃を撃ち、その炎を消滅させた。しかし、サユリは蠢く木の枝の一本に足をとられてしまう。

水呂狗は一目散にサユリの元へ向かい、右手から出した水の刃で

枝を叩ききった。

「空狐のヤツ、千里眼と順風耳を使って見えねえ所から攻撃してやる……」

「でも変だわ。狐なら狐妖術を最初に出すのが、一般的で確実に仕留められるのに」

「恐らく妖術の使用代償でしょう、前の妖術はどれも第一級の妖術です。膨大な力の代償で、狐妖術が一切使えないのだと思います」話し終えると次の攻撃が、再び三人を襲った。今度は土石流のような、巨大な土の波が押し寄せてくるのだった。

「二人とも、下がってる。それでもつて、準備を頼む」

土の波は三人にどんどん近づき、遂に距離は一メートルをきった。しかし、ユウはまだ撃たない。真下の地面が抉り出そうとも、ユウは構えたまま動かなかった。そして。

「今です、準備できました!!」

「よしっ!二人とも伏せてろ、いくぜ!!」

銃声が二回聞こえた後、土の波は跡形も無く消え去った。サユリはユウの指示で準備した、ある妖術を使用した。

「天の神の眼を、我の左目に。全ての大地を見透かし、想い人を見つけさせ給え」

「『下見眼げけんがんの術』か、第二級の探索系妖術じゃねーか」

ユウはサユリの秘めた力を見て、感心した。サユリはすぐに、空狐の居場所を発見できた。

「いたわよ、西の方角で距離およそ十二キロの場所!」

「では私の術で、射抜いて見せましょう」

水呂狗は持っていた弓を横に持ち、構える。すると弓の前に丸い水の塊が浮かび上がった。

「妖術『水尖波すいせんは』!」

水の妖怪河童である水呂狗の水の妖術は、西に向かって一直線に放たれた。しかし、ココで問題が起こってしまった。放った妖術の行き先が、人間たちの住む街なのだ。気付いたのはその一撃が、街

に到達してしまつた後のことだつた。

「ど、どうしましよう・・・」

「気にしたら負けだ、責任なんかとれねーんだから」

三人はなかつた事にして、戦闘を続行する事を決めた。

「クハハ、我はソナタらの後ろに居る。振り向けば死ぬぞえ〜」

三人の背後に、とてつもない狂気が立ち込める。後ろの声の主は冗談でも何でもなく、三人の首を狙っている。

「そんじゃ拝むぜ、その空狐さんのお顔」

ユウはノールックで背後の敵を撃つた。敵はヒラリとかわし、三人の目の前に姿を見せた。

「な・・・」

「クハハ、驚きじゃろうな〜。我は三千歳の割りにあまりに若すぎる、彼是二千年以上はこの姿ぞえ」

そこに立つていたのは、十二単を着ている十八くらいの女性だつた。変化の術だろう、三人はそう確信した。

「ほう、ソナタら変化の術かと思つておるのか・・・。我はそんなちやちな術なんぞ使わん、これでも禁術を多少使える身じゃからのクハハ、あの時『人食らいの術』で体を盗んでよかつたぞえ」

『人食らいの術』とは、妖怪の妖術の中では忌むべき術である禁術の一つだ。人間にしか効果が無いのだが、成功すれば体だけでなくその人間の人生やその人間が得るはずのもの全てを独占できる。

当然ながら、術の犠牲になつた人間は死ぬ。この術を受ければ、どのような善人でも地獄に落ちてしまふといわれている。

「他人の体で自慢なんて・・・、ふざけてるにも程があるわ」

サユリは空狐を罵倒し、攻撃をしかけた。サユリは水の妖怪、水の妖術を得意としている。

「妖術『爆裂泡の術』！」

サユリの口から、小さな泡が断続的に発射される。その泡は物体に触れると次々に爆発していった。

「まだまだ！妖術『痺れ霧の術』！」

サユリの攻撃は終わりを見せない。妖術に次ぐ妖術で、空狐を追い詰めていく。

だが、追い詰めていると思いきや追い詰められていたのは彼女のほうだった。

「クハハ。女よ、ソナタ生まればかりじゃる？生まれたてとはいえココまでの実力を誇るとは女の妖怪として感心する。しかし場数が足らん。ただ術を相手に撃てば勝てるなんて思うとる時点で、ソナタは死んだも同然じゃ」

空狐はサユリの攻撃を、実に鮮やかにかわしていた。サユリの術が杜撰だったからではない。単に実力が違っていただけだ。サユリはその事を、心の底から痛感した。

「まずは一人、潰しておこうかえ」

「あっ……」

サユリはその場を動けない。空狐の右手が、少女の首を掴んで締め上げた。

ギリギリ、ギリギリ、ギリギリと、命が壊れる音が全体に響き渡る。サユリも最初は抵抗したが、完全に力負けし両手がだらりと下がった。

「クハハ、薄情者共め。女子おなこの死を前に、奮起せずに逃げよったか」
空狐は千里眼を使って、二人を追跡した。

二人はとにかく駆け回っていた。サユリを見捨てたわけではない。実はサユリの命は費えていなかったのだ。それが解つたのは、サユリが合図を送ったからだだった。

サユリは空狐に首を絞められ両手をだらりと下げる直前に、ピーッとしたのだ。自分は無事だと、思いつきり闘えと男二人に告げたのだった。

「ユウ様、前のサユリ様の合図を受け取ってこのような行動をとっているのでしょうか？」

「さして、どうだかね」。あの空狐は今までの狐より、もしかした

ら九尾以上の敵かもしんないぜ」

二人は作戦が思いつかずじまい、オマケにユウは人間で妖術のよの字も使えない。ユウは人間である事を、これ程まで後悔した事はないだろう。

「お、そうだそうだ。この手があるじゃねえかよ、耳貸してくれ」
「な、何ですか？」

ユウはふとある事を思いついた。水呂狗はその内容を聞いて、「おお！」と納得したがすぐにそれが後悔と無念に変わってしまう。
「クハハ、覚悟を決め戻ってきたか。よかろう、我が跡形も無く殺してくれる！」

ユウは空狐の前に立ち、挑発する。案の定、空狐は妖術を放ってきた。

「うおおっ！」

ユウは完全にかわしたが、妖術の衝撃を体に受けてしまった。ユウはそのまま、地面を転がっていく。しかし、空狐の妖術はまだ発動し続けている。

「かわせねえか、後五発！」

ユウは妖術を銃弾で打ち消した。そのまま地面を転がって、物陰に身を潜めた。

空狐は見失い、次の標的を見つけた。

「今度は貴様じゃ！」

「おお、来たな・・・」

水呂狗は攻撃をよけ、ユウと同様に物陰に身を隠す。

空狐は痺れをきらして、大技を周囲に放つ。妖術の中でもトップレベルの破壊力をもつ、雷の妖術『豪光斬』ゴウカザンである。半径5キロに存在する全てを、雷撃と電熱で容赦なく葬る。

二人は出るにすら出られず、作戦を進める事ができずにいる。その意味は死以外にない。

「ぐああああああっ！！」「ぬおおお・・・！！」

残酷で血も涙も無い光が、二人を死に追い込んだ。雷撃で宙に舞

い、電熱の圧力で叩きつける。

「ぐ、くっ……」「うおおおっ……！」

しかし、二人は死なない。この事實は、二人もすぐには受け止められなかった。

そして今度は空狐が、悲鳴をあげる。

「うあああああっ！！女、いつの間がいい……！」

空狐は思わずよろけ、片膝をつく。その後ろには、肩で息をしているサユリの姿があった。

サユリは空狐が離れたと同時に、妖術の印を結び術を使う準備を整えていたのだ。

「水呂狗さん、実戦で初めて決めたよ……。……うっ、『水尖波』」

空狐はサユリの突然の復帰を予想していなかった。右腕を水の波動で、粉々に砕かれていた。

「馬鹿野郎が……」

「ココはどう見ても、ぼやく場面じゃないでしょう」

ユウはサユリの行動に、内心とても深い感謝を持っていた。死にかけの体で動き、妖術を放ち敵を無力化してくれたのだから。

これで空狐は印を結べず、抵抗する事も儘ならない。空狐の最期は近かった。

「これで終わりだ、空狐！」

「ひいっ！」

空狐は叫んだ直後、三人の前から姿を消した。

「終わったわね……」

「コンディションを万全にしよう。何か薬買ってくるから、オマエら大人しくしてろ」

ユウは街の薬局へ走る。サユリは横になり、眠ることにした。

しかし、その眠りは妨げられてしまう。

ドオオウン……！

何か空から落ちた。人間のような、にしてはあまりにも形が整っていない。それにこの顔はどこかで見たような、サユリはそんな風に思いその落ちたものに近づき確信した。

「ああ・・・、そんな・・・な・・・」

「どうしました・・・？まさか・・・」

水呂狗も異常に気付き、絶句する。そこにユウが、買い物から戻ってきた。

「な・・・！九尾のヤツ、先手を打ってきたワケか・・・」

そう、そこにいたのは九尾を唯一殺す力を持った希望の存在、シンだったのだ。

どこでどうやって殺したのか、三人には見当もつかない。

御水様のアイテムも、こうなってしまうと何の役にも立たない。

「何かも終わった、でも行くしかねえ。二人とも、来るなら死ぬって前提で来い」

二人は無言で肯き、今、三人の戦士が歩き出す。

8話 九尾の尾・デビルズ・テイルズ・（前書き）

一学期に突入し、やっと書けた8話です！

8話 九尾の尾・デビルズ・テイルズ・

ユウ達は、絶望した。唯一九尾を殺す力を持った者、シンが九尾の手で葬られてしまったのだ。

シンは見るも無残な姿で、空から降ってきた。九尾は先手を打ってきたのだった。

「こんな形で合流するなんて、悲しすぎるわ・・・」

「サユリ様、気を強くお持ちください・・・」

サユリは静かにシンを埋め、手を合わせる。ユウと水呂みろく狗も、静かに合掌した。

「別れの挨拶も、その辺でいいんじゃないか？なあ、御三方」

その声は、忘れもしない声だった。声が終わると同時に、青い空から稲妻が落ちる。その落ちた場所に立っていたのは、あの男だった。

「狐部院このへいん、九児きゅうじ・・・！」

最悪の妖怪のもう一つの顔、『狐部院九児』。ユウに初めて接触した時の姿で、本来の姿より弱体化しているがそれでも桁外れの力を誇る。

「では、前置きも面倒なので始めさせてもらう。オマエらから来いよ」

狐部院は挑発して、その場を動かなかった。三人は一斉に攻撃を開始する。

「学習しないな冬宮、オレの狐妖術は最高レベルだったろ」
が

前回の闘い同様、狐部院に攻撃は一切通じない。狐妖術を巧みに使われ、攻撃は全てかわされた。

「九尾、否、狐部院！アンタも空狐と同じ、『人食らいの術』を使ったの！？」

「は、そんな術の事なんざ今の妖怪は知らないのが普通だけどな。

でも違うな、オレは『仙術』を使ったのさ。『人食らいの術』はヒトにしか効かないが、オレが使った仙術は、この世に存在する形あるもの全てに効くものだ」

つまり、九尾は人格を妖怪から奪い体は人間から奪ったということになる。当然、仙術は妖術の上位互換なのだから人格と体を奪われた妖怪と人間が死ぬ事はない。しかし、仙術も完全ではなかった。「しかしまあ、この人格を持ってからオレは随分と温厚になったと自分でも思うぜ。仙術で体と心を奪ったヤツらに、悪い事をしたと思ってる。でも本来の姿になれば、人格は元通り。無駄骨と、言わざるを得ない。実際、心を奪った妖怪は何も思わないし感じないせいか食べることにすらせずに、飢餓で死んでしまった。人間に至っては、体を奪い魂だけで今をさ迷わせている。私欲の結果とはいえ、少し同情してしまうな」

三人にとつて、狐部院の言葉は全て安い幻想論に聞こえていた。サユリは怒りを抑えようと、必死で拳を握る。が、自分の心を、自分の昂る怒りを抑えることはできなかつた。

「妖術『水尖波』！！」

「・・・範囲が広い。よし、オレの力を見せよう」

サユリが放った巨大な水の槍に対して、狐部院は左手を前に突き出すだけに留まった。

「妖術『雷公盾』」

狐部院の手から稲妻が無数に放たれ、盾の形を帯びていく。そしてその雷撃は水尖波を通って、サユリへ一直線に向かっていた。「牙獣の激昂・デスレイズ・！吹っ飛ばスマシ野郎、オレの存在忘れんなっ」

ズドオンッ！！

ユウの放った銃弾は稲妻の盾に直撃し、轟音と地鳴りを起こした。狐部院は先ほどと同じ姿勢で立っていたが、左手は黒こげになっ

ている。狐部院は怪訝な顔をして、少し笑んだ。

「デスレイズ、か。面白い銃だ、これは結構な展開が予想される。少々本気で、狩らせてもらおう」

狐部院の姿が、三人の前から消えた。水呂狗はすかさず、印を結ぶ。

「妖術『水刃守』の術！」

水呂狗は口から水を吐きながら、その場で回転を始める。瞬く間に水の刃の壁ができあがった。

「サユリ様、『殺割土』の術を！」

サユリは水呂狗に言われる前に、既に印を結び終えていた。サユリは妖力では水呂狗に及ばないが、使える妖術の量は彼の倍以上ある。特に一目置くべきは、水の妖術を得意とする御水様が使えない妖術である土の妖術を使いこなせる点だ。ちなみに御水様には弟がいて、土の妖術の修行は基本弟頼りなのだ。

サユリは両の手を、地面に優しく置いた。

バキヤツ！！

「うおっ！？何故地面の下にいるなんて解ったんだ！？」

九尾は地震以上の衝撃に耐え切れず、地面の下から飛び出した。そして飛び出した場所には、ユウが永遠の民の涙・アイヴァールドルフを構えている。

「何でかなんて、簡単だよ。単純にオレは目がいいんだ、空を見た時、影も無かったし地面の下だろうと思っただまで。ピンチだな」
オマエ

「やってくれるな人間！ではコレを見るがいいっつー！」

狐部院の背後に九本の巨大な尻尾が現れた。そのうちの一本が姿を変え、現代にも通じる凶悪な兵器となる。

「『七の大筒』、コレで太古のインドを滅ぼした」

狐部院の担ぐ大砲から、妖気でできた恐ろしい砲撃が放たれる。

だが、ユウは下がらない。銃弾を二発放ち、前に出た。

「何・・・！？オレの大筒と互角以上の力、だと？」

「バーカ、コイツは貫通特化の特注品なんだぜ」

銃弾は大砲の砲撃を抜け、狐部院の腕を貫いた。しかし、狐部院も愚かではない。攻撃が通る事を最初から考え、いつでも狐妖術を使えるよう準備していた。

当然ながら、狐部院に攻撃は通じない。狐部院は更に砲撃を開始しようとした。

「くっ、地面が・・・」

サユリが使った土の妖術のせいで、あちこちでヒビが入り隆起していた。狐部院は足を捕られ、左によるけてしまう。

このスキを三人が逃すはずもない。

「妖術、ダブル『瀑流掌』！！」

「牙獣の激昂・デスレイズ-！！」

ユウは大筒を撃ち、二人は狐部院に攻撃を加えた。先ほどと同じなら、狐妖術でかわされていた。

だが、今回は違う。狐部院は足を捕られたせいで、印を結ぶ事ができなかったのだ。

「かはっ・・・、『七の大筒』が・・・！！しかし！」

狐部院は尻尾を再び出現させ、『二の手裏剣』を生み出す。これは前に闘ったとき使った武器で、桁外れの追尾機能を備えている。

狐部院はソレをユウに投げつけた。

「水呂狗、サユリ！水の妖術でアレを止めてくれ、止めたらオレが決める！」

二人はユウを信じ、妖術を手裏剣に向かって放った。手裏剣は水圧に阻まれ、回転したままその場に留まっている。

狐部院は呪文を唱え、更に威力を強化しようとする。が、それがスキを生んだ。

「周りをよく見ろ、糞狐！！」

「しまっ」

ドオオンッ！

牙獣の激昂・デスレイズ・が、狐部院の頭を撃ち抜く。狐部院は狐妖術を使う間も無く、攻撃を直に喰らった。だが、相手は日本三大悪妖怪の一人。すぐに立ち上がり、本性を現す。

「カツ、流石に応えたぞ……。よかるう、千年振りじゃ。仙術と残り七つの尾が織り成す、絶対無敵の技を見るがいいわ!!」

九尾となった狐部院は、七つの尾を振り乱し三人を襲う。その七つの尾は各々、武器へと変わっていった。

「喰らうがいい!!」『五の弓』、『四の拳』、『三の杖』!!」

九尾は遠隔操作で三つの武器を自在に操った。サユリは杖の強烈な一撃を背中に喰らって、地面に倒れてしまう。

水呂狗は倒れたサユリの元へ走る。が、そのスキを逃さなかった九尾は顔面に拳を叩き込んだ。

「うつつ……。く……。っそお……」

「オマエら……。畜生、一旦引くしかねえか!!」

ユウは二人を抱え、この場を離れようとした。が、『五の弓』の矢が逃げようとするユウの背中を容赦なく射抜く。

「ぐあつ……。!仙術でオレの行動を……。先読みして……。んのか……?」

ユウの言ったように、九尾は仙術を使って三人に心を読まれていると感づかれることなく攻撃を仕掛けていた。

事態は際限なく悪化していく。ユウを射抜いた弓は妖気と瘴気を纏っており、それらが彼の肉体を破壊しているのだ。人間の体にとって、妖気は猛毒以上の異物でしかない。

ユウは、生きているのか死んでいるのか分からなくなっていた。意識はあるのに、感覚が無い。心臓は動いているのに、思考回路が働かない。

目の前で、仲間が死にかけているのに何も感じない。

ユウは、何もしなかった。

九尾は高笑いした。二人の妖怪と一人の人間の信念を、心底馬鹿にしながら。その笑いは全国に響きわたり、人間と妖怪に、絶望を与えていた。

「ウソ・・・、お兄ちゃん負けちゃったの・・・？」
「・・・ユウユウ・・・！」

ミキは現状を受け止められず、そのまま動かなくなっている。一方カナは泣きじゃくり、両手を握り締め地面を殴り続けた。

「何よ何よ、何よ何よ！！アタシ、何もできてないじゃない・・・
！ユウもミキちゃんも皆のために頑張ってるのに・・・、アタシは事が済むまで大人しくしていようだなんて！！そんな考えを持った罰でしょうね、アタシの大切な幼馴染失くしちゃった・・・」

カナは懺悔し続け、地面は彼女の涙で濡れていた。ミキはそれを見て、こう言った。

「カナちゃん、お兄ちゃんはまだ死んでないよ。ううん、生きてる。生きてるよ」

カナはミキの方を振り向く。この状況で、ユウは『生きてる』と断言したのだ。死んでいるのが当たり前前の状況下で、九尾に立ち向かった男の妹は断言した。

「ミキちゃん！！ユウは、死んだの！！九尾に殺されて、死んじやつたんだつっつ！！！！！！」

カナはミキの発言を気休めと思い、重すぎる現実を小学生に無鉄砲に突きつける。

しかし、ミキは笑っていた。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん強いもん。剣と銃の腕はピカイチだし、武術だつて並みじゃない。それにお兄ちゃんに武術を教えたの、カナちゃんじゃん」

カナはハツとして、自分の脳内をエンジン全開にした。そうだ、ユウに武術を教えたのは・・・。

「・・・そうよ、よくよく考えると馬鹿ねアタシ。ユウはアタシの弟子！あんな狐一匹に殺されるもんですか！！」

「ミキや、それにお嬢さん。コレを、あ奴の元へ届けてはくれぬか？」

二人の会話に、御水様が入ってきた。彼は瓶詰めの水を、彼女らに手渡す。

「コレ、喜々乃真水ききのしんすい！！いいんですか御水様、大事な水なのに・・・」

「構わん構わん、命より高いものなんぞ無いのじゃからな」

御水様は微笑む。御水様も希望を持っていた。

「お二人さん、この雷獣に乗っていけ。目的地まで三十分あれば着くじゃろ」

「有難うございます！！」

二人の少女は光り輝く獣に乗り、大切な者を助けるべく向かった。

九尾は邪魔者が消えたのをいいことに、大破壊を始めた。全ての武器を使用して、街を次々に一瞬で滅ぼしていった。九尾はこの凄惨な景色を見て、大層満悦している。

「カツカカカカ！！何かが滅ぶ光景はいつ見ても、素晴らしいものがある。何もなくなっさらな状態、コレこそが世界の真の姿なのじゃ！ソレを壊した人間は、罰を受けて当然の存在。ワシは天に代わって裁きを下しているだけに過ぎんっ！！誰にも邪魔はさせえん！！カカカカカ！！」

誇らしく語っているところに、二匹の獣と二人の人間が視界に入る。九尾はそれを見て、すぐさま襲いかかった。

「わっ、来た来た！避けて、猫！！」

「カナちゃん・・・、このコ達は『雷獣』だよ・・・」

襲われたのは雷獣に乗ってきたカナとミキだった。雷獣は九尾の

尻尾と爪の嵐の攻撃を掻い潜って、物陰に身を潜める。

「グルルウ・・・」 「グルル・・・」

「あっ、カナちゃんアレ!!!」

ミキは倒れている三人を見つけ、カナに言った。カナも三人の姿を確認した。

しかし、脅威というものはすぐには消えないものである。

「そこかあああ!!!」

九尾は血眼になって、二人と二匹に襲いかかる。

ミキは瓶を開け、ユウ達の方に放り投げた。カナはそれを見て、驚愕を隠せなかった。

「何してるの!? 大事な水なのに!!!」

「コレでいいの! カナちゃんちよつと黙って!」

瓶の中の水は奇跡とも言える軌道で、三人にかかった。しかし、その程度で難は去るはずもないのも事実である。

しかし、ミキの咄嗟の行動が状況を一変させてくれた。

「牙獣の激昂 - デスレイズ - !!! おつらああああっ!」

「妖術ダブル『水尖波』!!!」

強烈な二発が九尾の巨体を十メートル以上吹き飛ばした。

「ぐががつ!」

九尾は情けなく倒れると、すぐに立ち上がり状況を整理しようとする。

だが、そんな悠長な時間を与えるほど今の彼らは優しくはない。

「永遠の民の涙 - アイヴァールドルフ - 六連射! ! 糞狐、よくもコケにしてくれたな。もうテメエはオレ達の手で殺してやるぜ!!!」

ユウの止まない銃撃が九尾の全身に傷を負わせる。

「・・・貴様ら、まだ生きていたのか」

「やる事やらねえと、死んでも文句言われるからな」

三人は九尾に向かって宣言する。

「・・・九尾は、必ず殺す!!!」 「」

8話 九尾の尾・デビルズ・テイルズ・（後書き）

とりあえず、九尾は化け物なんだよ・・・。

9話 化け物の最期・モンスターズエンド・(前書き)

テスト1週間前、第一章完結しました〜!!

9話 化け物の最期・モンスターズエンド・

「……九尾^{オムエ}は、必ず殺す!!!」

ユウ達はカナ達を後ろにして、九尾に向かって宣言した。

九尾はコレを軽くあしらう。

「カカカ、その程度の力でぬかすか愚か者共。今度こそ消してくれ
る」

双方は同時に攻撃を仕掛けた。カナとミキは戦場から離れ、物陰に再び隠れる。

「カナちゃん、お兄ちゃん達の言ったとおりに動こうね」

「オツケー、大丈夫よ」

二人は、バラバラに散っていった。

ユウはサユリとペアで攻撃をし、水呂狗は遠距離から水の妖術で追い詰める作戦をとった。だが、いくら攻撃を当てようと九尾にダメージは入らない。狐妖術がココまで厄介だとは、三人は思っても見なかった。

「ふん、ワシの武器と仙術^{ちから}を見てなお向かってくるか。仕方あるまい、ワシの最大の武器を見せよう。我が尾の武器を全て融合させ、究極の武器を造る!!!」

九尾の声と共に、八つの尾が光となり一つになった。それは、古風ながらも生命を絶つにはうつつつけのものだった。

「『一の刀』、使うのは千年ぶりじゃな」

サユリはユウを掴んで、水呂狗と共に更に遠方へ下がる。九尾は笑を浮かべて、刀を振った。

「なっ……!」

ユウの左腕から血が噴き出す。ユウがそれを見た時には、左腕は完全に失くなっていた。

「あの刀……、距離なんて関係ねえのか……?」

「仙術、発動」

グンツ

三人と九尾の距離が無くなった。距離が縮んだという、そんな感触すら無く。

九尾は刀を振り、三人を一刀両断する。

「カカカ、複数の人間を同時に殺すのは少し殺風景じゃが気分は悪くならん」

「・・・そんな・・・」

カナはその瞬間を見ていた。刃を振り終えた後には、三人の姿は無い。

だが、それは死んだからではなかった。

「よっし、かわせたな・・・」

「あのコ達が上手く、やってくれたのね」

サユリは負傷したユウを担いで、カナ達の元に降りる。カナはユウを見て、悲鳴を挙げた。

「いやあああ!!!」

「コラ、騒ぐな!!!」

九尾は悲鳴を聞いて、すぐさま皆の居場所を知る。しかし九尾は、敢えて追う事はしなかった。九尾は、この闘いを遊戯のように楽しんでるのだ。

「この刀があれば、こんな闘いなんぞ遊戯にすらならんわ!カカカカカカ!!!」

ユウは意識が朦朧としていた。左腕を斬られたショックで、視界がぼやけてしまっている。

カナはユウを必死に励まし、意識を保たせようとする。

「こうなっちゃったら、皆で『石』を探しましょう!」

「了解です!」

こうして皆、再び散った。そのワケは少し時を遡る。

ユウはある事を思い出していた。

『そうか、その手があったんだ・・・』

ユウ以外の全員がユウの顔を見る。彼は少し驚き、顔を赤くした。『おいおい、皆してこっち見んなよ・・・』

カナが更に近づき、ユウの顔は梅干以上に赤く染まる。カナはその顔を見て、プツと笑った。

コレではただのシャイな野郎である。

『とりあえず、離れてくれカナ。いいか、まずアイツは素じゃ仙術は使えない。ある物を使わないと仙術どころか多分、あの高等な狐妖術すら使えない』

その場で響めきが起こる。狐である九尾が、狐妖術を使えないと言っただ。

ユウは気にせずに、話を進める。

『アイツは『妖石』っつー、レアな鉱物を大量に持つてるんだ。前に闘った時は、少しガツチリしてた印象があったから服に仕込んでたんだろ。『妖石』は妖気を注ぐ事で、注いだ妖怪に妖力を与えてくれる。雑魚でも五個くらいあれば、鬼も殺せる力をつける代物さ』
そしてココは、九尾の根城。『妖石』がある所とすれば・・・。

『つまり、この地面の下に『妖石』が埋まっているワケですね』

水呂狗はズバリ言った。作戦は決定する。

『名付けて、『妖石堀り掘り大作戦』！掘ったら壊せ、壊せなくてもヒビいれる！ヒビくらい入れれば、使い物にならねえからよ』
こうしてネーミングがあまりに幼稚な作戦が、始まった。

九尾は散り散りになった一団のうち、カナとミキのチームを追いかけた。生身の人間に九尾の鋭く大きな爪が入れば、体を貫かれ血を大量に流してしまうだろう。

だが、九尾は追う相手を間違えたようだ。

ベキイツ……

「ぐがつ!!小娘、やってくれるなあ……」

「九尾の爪を蹴りで……、へし折ったの?」

なんと驚いた事に、カナが一蹴りしただけで爪が簡単に折れてしまったのだ。

このシーンを見ていた他の面々も、驚きを隠せない。

「カナ様、お強いですね……」

「イヤイヤ、ま……。オレの拳法の師匠なんだけど、まさかここまでとは……。ってか九尾^{あのヤロウ}、脆すぎだろ」

九尾が苦悶の表情を浮かべているスキに、ユウと水呂狗は次々に妖石を掘り出し破壊していく。

「水呂狗、……。今、いくつだ……。?」

「……。七十個目でしょう、か!」

二人は相当な数の石を砕き、限界が来ていた。それを化け物が、見逃すはずはない。

「カカカ!主らの首、この場で飛ぶがよいつつ!」

「くそつ……」

九尾の尾が二人めがけて向かってくる。限界である二人は、避けようにも避けられなかった。

「妖術!『水尖波』!」

水のレーザーが、九尾の尾を貫いた。サユリの妖術であり、水呂狗直伝の『水尖波』だ。

そして、この事実は双方にある結論を抱かせる。

「ねえ、九尾って不死身なのよね……。?今の傷、治ってないけど……」

「ぐがつ……。ぐう……」

もう決まった。

完全に確定し、決定した。

十全にその事実が、場を支配した。

「九尾アイツはもう、不死身じゃない」

五人の勇敢なる者達は、一斉に九尾を攻撃した。

ドツゴオオオオンツ!!!

九尾の影は動かない。攻撃によって発生した爆煙が消え、ボロボロになった九尾が現れた。

しかし、その顔は笑っている。よく見ると、倒れているのは五人の方である。

「くそ……、化け物は化け物つてか……」

「妖気がすつからかんでも倒せないなんて……、非常識にも程があるわね……」

五人の攻撃は確かに九尾を追い詰めた。しかし九尾の底知れない体力が勝り、五人は体力が尽きてしまったのだ。

そして九尾は口を大きく開け、倒れている五人の一人を食おうとする。標的は、自分をここまで追い込んだリーダーのユウだ。

「ふん、何をどう足掻こうがワシの勝ちに変わりはせんぞ……!」

そう言った九尾の体が突如小さくなっていく。九尾自身、何が起きているのか解ってはいなかった。

「……カナ、オマエ……」

掠れる意識の中、ユウが見たのは大量の石がバラついた所に立っているカナの姿だった。最もダメージが少なく、体の自由も効いていたのが彼女だったのだろう。乱戦のスキを突いて、地面にある残りの妖石を壊していた。かなりの数の石を壊された九尾は、自分を巨大化させる事もできない。

「まだじゃ!ワシの『一の刀』さえあれば……!」

九尾は自分の手に、刀が無い事に気づく。妖石を破壊されたせいで、刀を具現化できなくなっているのだ。九尾は何もできない。と

いう事は、これで妖石を全て破壊した事になる。

「ユウ、立てる？」

「最後は、決めてください」

サユリと水呂狗は、自分の体を顧みず一人の少年を持ち上げた。その少年の手には、銃がある。

「まったく、これじゃ不死身の『ふ』の字も無えな。地獄で喚いてろ、糞狐」

この日、日本をどん底に陥れた化け物は死んだ。

九尾が死んだ（公には新型のウイルスが消滅した）後、ユウ達兄妹には山のように仕事が来ていた。

ネット上で様々な噂が飛び交い、ユウ達は英雄に祭り上げられていた。

「ううう、お兄ちゃん……。少し休業しない……？近くに新しいスーパー銭湯ができたみたいだし、入って体休めようよ」

「そうするか……。カナも呼んで三人で行こう、行く用意してる」

さて、皆さんはお気づきでしょうか温泉というからにはオチが見えてくるはず。男なら誰もが望みの展開に、一気に突っ込んでいきます！

「ふ〜、温泉つてやつばいい」

「急にユウからメールが来てビックリだったけど、中々いいじゃないココ」

カナとミキは体の芯から温泉を浴びて癒されている。世に蔓延る変態共なら、コレだけ暴れてしまっようなプロモーションである。

「あ、カナさんにミキちゃん。お久ですね〜」

「サユリさん……!？」

なんとサユリが、この温泉に現れたのだ。聞くと何でも、東京見

物をしていて汗をかきサツパリしたいと思っていたところ、ココを見つけたようだ。

コレで、大、中、小が揃った。(何がなんて、言われずとも解るだろう)

一方ユウは男一匹で、五右衛門風呂にずっと浸かりっぱなしだった。

「あゝあ、折角来たはいいもの……何かイベント起こらねーかな、ココに妖怪が現れて大騒ぎになってその余波で……」

思春期の少年はそこまで言って、黙る。ハツキリ言おう、そんな事が簡単に起こるはずがない。

「あ、ユウ様。お久しぶりです、水呂狗です」

都合のいい事に、妖怪が現れた。しかしそれは知り合いの妖怪、河童の水呂狗である。その練り上げた肉体は、都内の女性が全員ノックアウトしそうな程美しいものだ。

「サユリもいるのか、今時東京見物とは珍しいもんだ」

「いやはや、東京は暑くて適わない。私二回くらい倒れました、熱中症で」

じゃあ来んな、というツツコミをユウは心の中でした。

こうして再び合流した五人は、そのまま延々と一時間風呂に入っていた。

「やゝ、スツキリスツキリ！」

五人はほぼ同時に浴場から出てきた。男二人は三人官女の美貌に、鼻血を出しそうになる。

(コレは、いかん)

しかし、体の正直な反応に脳の抑制命令が間に合わずピュウと噴いてしまった。

「ホント、ろくでもないわね男共」

二人を安静にさせた三人は二人の事をお構いなしに、コーヒー牛乳を買ってグビツと飲み干す。

「くそゝ、血を出しすぎて頭が……」

フラフラして歩き出すユウを見て、カナはその足を止めに行った。しかし、止めようとしてコケてしまう。

「うわっ！」

コケたオマケとも言つべきか、二人の唇の距離が僅か一センチも満たない所にあつた。

「あ、・・・大丈夫か・・・？」

ユウは顔を赤らめ、急いでカナから離れる。カナも顔を赤くしユウから目を反らした。

その沈黙が二分くらい続いた後、カナはユウに近づいてコーヒ―牛乳を渡した。

「はい、コレで体冷やせば血の止まりが少しは早くなるでしょ？」

ユウはそれを素早く受け取り、一気に飲み干した。

9話 化け物の最期・モンスターズエンド・（後書き）

第一章完結、最初はどうせ二桁くらいしかアクセスないんだろうな
くと思っていたら予想以上にアクセス数が多くてビックリ！これか
らも書ける時に、必死に書いていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2326u/>

オレの職種は邪悪狩り-ブラックハント-

2011年10月3日03時31分発行